

岩美町文化財調査報告書第20集

鳥取県岩美郡岩美町

高野坂31号墳

2001・2

岩美町教育委員会

序 文

この発掘調査報告書は、平成11年度の広域農道整備事業に伴い実施した高野坂31号墳の調査記録です。

岩美町は、鳥取県の最東端に在り、兵庫県との県境に位置する人口約15000人の町です。風光明媚な山陰海岸国立公園を擁し、国の天然記念物に指定された浦富海岸、国指定天然記念物のカキツバタ群落とともに、原始・古代遺跡も多く、歴史豊かな風土と自然に恵まれた環境にあります。

今回の調査が行われた高野坂31号墳の所在する小田川流域は、『続日本紀』の記事で「因幡國銅鑛献」とあるように、銅鑛の採掘が行われたと考えられている荒金地区を擁しています。また、古墳の所在する高野坂越し（蔵見越し）と呼ばれる峠道は、古代に於いて伝馬の通じた幹道と考えられています。この幹道は、この巨濃郡の郡衙に結ばれた伝馬の道（伝路）をなしていたものと思われます。このように歴史的にも重要な地域でありながら、近年の各種開発事業の増加に伴い、生活環境も大きく変貌しつつあります。

このような状況の下で、先人の残した文化遺産としての埋蔵文化財も大きくその影響を受けています。しかし、この貴重な財産である歴史資料を後世に残し伝えることは、今を生きる私たちの責務であると考えます。高野坂古墳群は、かつて今回と同様、広域農道整備事業に伴い昭和62年より平成2年までの4カ年間にわたって調査した経緯があります。今回調査した高野坂31号墳は、関係各機関との協議・調整を行った結果、記録保存という形で残すことによりその趣旨に添うことにしたものです。

今回の調査では、多くの情報を得ることは出来ませんでした。方形壇を有する古墳であったことが判明しました。高野坂古墳群の性格を考える上で貴重な調査でした。

発掘調査が完了し、その成果を報告することが出来たのも、地元岩常地区をはじめ関係者各位の惜しみない援助とご協力をいただいた賜と存じます。

なお、ささやかな冊子ではありますが、本書が町民の郷土研究の一助として活用され、埋蔵文化財の保護意識の高揚に役立てていただければ幸いです。

平成13年2月

岩美町教育委員会 教育長

大黒 啓之

例 言

1. 本書は、平成 11 年度に岩美町教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査を実施した古墳は、鳥取県岩美郡岩美町大字岩常字高野坂口 895 - 81 番に所在する高野坂 31 号墳である。
3. 調査は、平成 11 年 6 月より同年 11 月 15 日まで現地調査を行い、平成 12 年 3 月をもって全作業を終了した。
4. 本書に用いた方位は、第 1・2 図は真北を示し、他は磁北である。岩美町に於ける磁北は、真北に対し西に 6 度 40 分偏している。
5. 遺構図中の遺物に付した番号は、遺物実測図の遺物番号に対応している。また、写真図版に於いても同様である。
6. 遺物実測図のスケールは、須恵器・土師器 1 / 4、鉄製品 1 / 2 である。
7. 本書の執筆・編集は、中野知照・松本美佐子・中島伸二が共同して当たった。
8. 調査に当たり、鳥取県埋蔵文化財センター牧本哲雄、島根県調査研究センター松本岩雄の諸氏からご教示を受けた。また、現地・整理作業の全期間にわたって宮下美江子・高垣恵巳子の協力を得た。
9. 発掘調査によって作成した記録類および出土遺物等は、岩美町教育委員会に保管している。
10. 発掘調査の体制は、下記の通りである。

発掘調査主体	岩美町教育委員会	教育長	大黒 啓之
調査指導	鳥取県埋蔵文化財センター		
調査員	中野 知照		
調査補助員	松本 美佐子		
事務局	岩美町教育委員会事務局生涯学習課		
作業従事者	飯野 秀樹、太田 弘道、太田 道子、奥田 悦夫、奥山 光子、 小林 友宏、高垣 恵巳子、田淵 淳子、榎本 ふじの、 宮下 美江子、宮本 よし子、山下 鶴枝、山本 恵美子、 山本 吉春		

本文目次

第1章 調査に至る経緯	(中島)	(1)
第2章 遺跡の位置と歴史地理的環境	(松本)	(1)
第3章 調査の結果		
第1節 高野坂31号墳の概要	(松本)	(6)
第2節 調査の概要		
1) 墳丘	(中野)	(8)
2) 石室	(中野)	(11)
3) 石室内遺物出土状況	(松本)	(17)
4) 墳丘周辺の遺構	(中野)	(17)
5) 石室内出土遺物	(松本)	(18)
第4章 総括		
第1節 高野坂31号墳の墳丘と石室	(中野)	(22)
第2節 高野坂31号墳の出土遺物について	(松本)	(24)
第3節 まとめにかえて	(松本)	(25)

挿図目次

第1図 岩美町遺跡分布図	(3)
第2図 高野坂古墳群全体図(支群構成図)	(6)
第3図 高野坂31号墳、周辺地形図	(7)
第4図 高野坂31号墳、調査前地形実測図	(9)
第5図 高野坂31号墳、調査後地形実測図	(10)
第6図 高野坂31号墳、全体見透図	(11)
第7図 高野坂31号墳、墳丘断面土層図	(13・14)
第8図 高野坂31号墳、石室実測図	(15・16)
第9図 高野坂31号墳、棺台・遺物出土状態図	(19・20)
第10図 高野坂31号墳、出土遺物実測図	(21)
第11図 高野坂31号墳、石室平面図形の企画	(23)

挿 表 目 次

第1表 高野坂31号墳、出土遺物観察表

図 版 目 次

- 図版1 [1] 調査前全景（東より） [2] 調査前石材露出状況（南より）
[3] 表土除去後石室全景（南より） [4] 石室全景（南より）
- 図版2 [1] 玄室奥壁石積状況（南より） [2] 奥壁左隅石積状況（天井石を見上げる）
[3] 奥壁左隅石積状況（南より） [4] 奥壁右隅石積状況（南より）
- 図版3 [1] 右側壁石積状況（西より） [2] 左側壁石積状況（東より）
- 図版4 [1] 第1次床面遺物出土状況（南より） [2] 第1次床面遺物出土状況（南より）
[3] 第2次床面遺物出土状況（南より） [4] 第2次床面遺物出土状況（北より）
- 図版5 棺台検出状況（南より）
- 図版6 [1] 周溝検出状況（東より） [2] 腰石検出状況（南より）
[3] 腰石検出状況（北より） [4] 掘り形検出状況（北より）
- 図版7 [1] 方形壇検出状況（南東より） [2] 方形壇検出状況（南より）
[3] 方形壇検出状況（南西より）
- 図版8 31号墳出土遺物・1
- 図版9 31号墳出土遺物・2

第1章 調査に至る経緯

昭和58年、本町^{まな}真名から福部村^{ふくべ}蔵見^{くらみ}を経由し、国府町^{こくふ}美敷^{みに}を結ぶ広域農道の建設が、鳥取県鳥取農林振興局により着手されることになった。この広域農道の路線は、本町岩常地区に於いては、上ミツエ遺跡、さらには高野坂古墳群^{たかのだか}中を通過する計画であったため、昭和60年に上ミツエ古墳群、昭和61年に於いては上ミツエ遺跡、引き続き昭和62年より平成2年度までの4カ年間にわたって高野坂古墳群の発掘調査が行われた。

今回、発掘調査を実施した高野坂31号墳は、この広域農道整備事業の工事区域内に於いて樹木伐採を受託された民間業者によって平成10年11月に発見された。本町教育委員会は、埋蔵文化財が確認されたという連絡を受け、直ちに開発当局の鳥取県鳥取農林振興局、工事業者と埋蔵文化財の保護について協議を行った。協議の結果、路線変更等の調整が工法上不可能であるということで、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなった。

調査に所要の経費については、原因者となる鳥取県鳥取農林振興局が負担した。調査体制を整え、平成11年6月より発掘調査を開始し、11月中旬に現地調査を終了した。同年12月より報告書作成の作業に入り、平成12年3月をもって全作業を完了した。(中島)

第2章 遺跡の位置と歴史地理的環境

地理的環境 [第1図]

岩美町^{いわみ}は、鳥取県の最も東寄りに位置する。北側は日本海に面し、三方を山地に囲まれる。西側は福部村に、南側は国府町に隣接する。東側は、兵庫県^{みかたぐん}美方郡^{あまがみ}浜坂町および温泉町と県境を隔てて接する。町内には、標高1000mの河合谷高原より源を発する蒲生川^{かわけだに}が北西に貫流し、その南西側には、同じ山塊より発した小田川^{がもう}が北流している。その流れは途中で合流し、日本海へと注ぐ。二つの河川の周辺には、肥沃な谷平野、沖積平野が形成されている。

岩美町の海岸線は変化に富み、山陰海岸国立公園に指定されている。羽尾岬^{はねお}、陸上岬^{くがみ}が海に突きだし、その間に美しい弧を描いた砂浜が形成されている。網代^{あじろ}、田後港^{たじり}という良港にも恵まれ、漁業の町としても良く知られているところである。

高野坂31号墳は、高野坂古墳群(7)中にあり、JR岩美駅より南南西約3.5kmに位置し、鳥取県岩美郡岩美町大字岩常字高野坂口895-81に所在する。

高野坂古墳群は、小田川左岸の下流域、二上山^{ふたがみやま}の南東側山麓に位置し、31基の古墳、横穴墓群を確認している。31号墳は、群中最も西寄りに位置し、標高的にも多くが50~90mに在るのに対し120mを測る高位置に立地する。これら高野坂古墳群の所在するところは、福部村

^{くらみ}蔵見方面へ通じる蔵見越し（高野坂越し）と呼ばれる旧道が残っており、交通の要衝としても重要な位置を占めていたことが推測される。

歴史的環境 [第1図]

岩美町の歴史の幕開けは、縄文時代より始まる。従来、鳥越の沢尻（50）で条痕地、無文地を呈した十数片の縄文土器が採取されたほか、岩井廃寺跡（47）より縄文晩期の深鉢が、そして山ノ神5号墳（55）の発掘調査時に、縄文前期の土器片や石鎌・石斧の出土が知られていた程度であった。

今年度（1999年）調査した新井三嶋谷遺跡（67）に於いて、縄文時代後期の土器片を伴った長径 1.43 m、短径 1.34 m、深さ 0.4 m を測る挿り鉢状のやや歪な円形の土坑を検出しており、岩美町内では初めての遺構検出例となった。土器片の他、多数の安山岩系の石材・剥片、そして黒曜石の剥片も含まれ、この場所で石器を製作していたであろう事が推察された。また、遺物包含層より晩期の突帯文土器を検出している。このように確実に縄文時代の遺跡は増加している。

弥生時代に入ると、蒲生川下流域の沖積平野にいくつかの遺跡が見られる。集落跡として昭和40年代の河川改修の際、川底より弥生中期～後期の壺・甕・器台などの土器片の他、^{ふとがたはまぐりばせきふ}大型蛤刃石斧・石包丁・砥石等の石製品を出土した新井遺跡（70）が知られている。

また、新井遺跡に隣接した山腹に所在する上屋敷遺跡（69）からは、流水文銅鐸を出土している。この銅鐸は、近年調査が行われた島根県加茂岩倉遺跡出土の31・32・34号鐸と、以前より知られていた神戸市桜ヶ丘3号銅鐸とともに同じ鑄型で造られた兄弟鐸であることが判明し話題となっている。

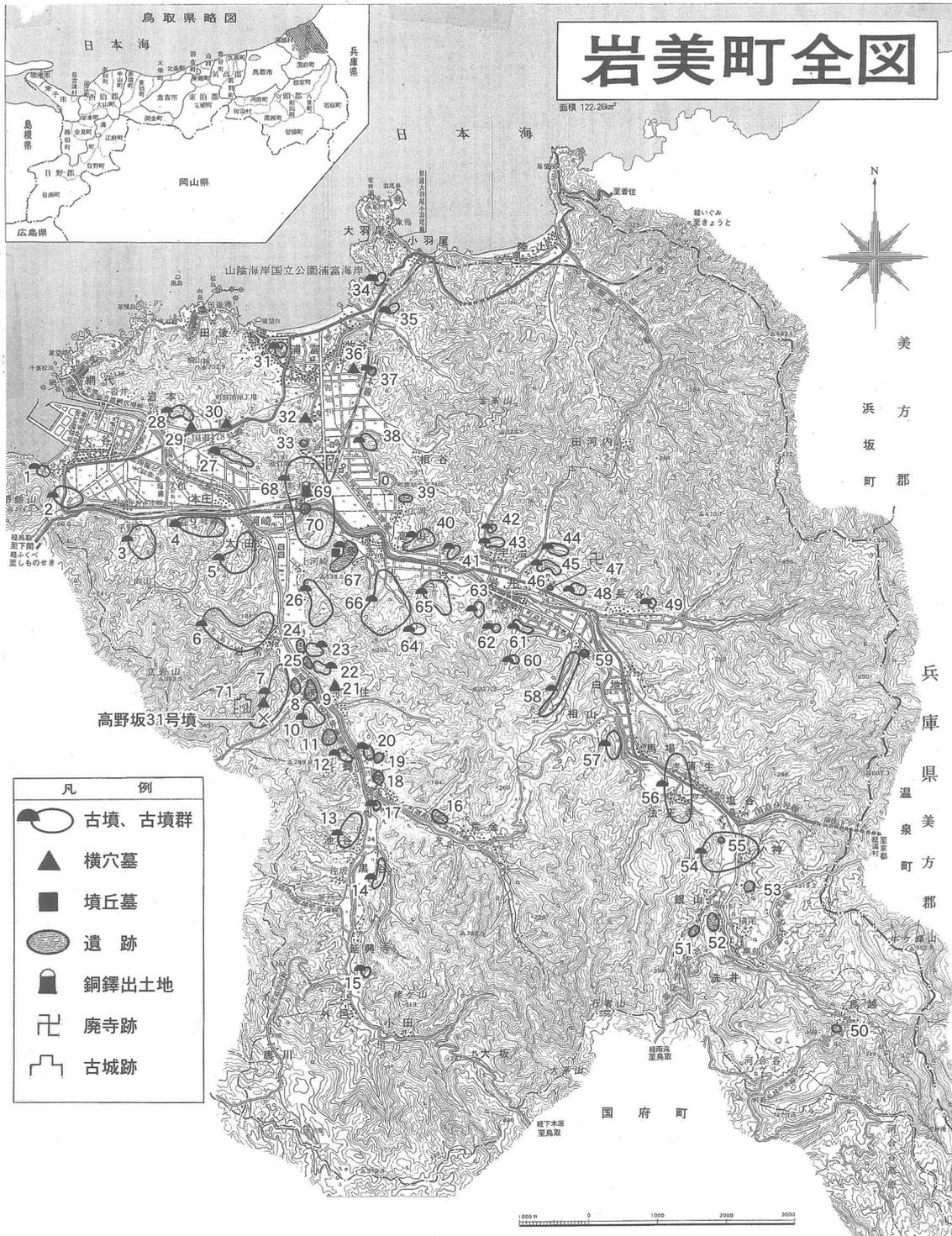
上屋敷遺跡から南東2kmにある新井三嶋谷遺跡では、後期初頭に造営されたと考えられる貼石墳丘墓^{註2}を1基、また時期を確定しがたいが、ほぼ同時代に造られたであろう方形の墳丘墓^{ふんきゅうぼ}を1基確認している。この貼石墳丘墓（三嶋谷1号墳丘墓）は、この時期の墳墓の中では、全国的にも最大級のもので、南北約26.5m、東西約18m、高さは最大約3mを測る。墳丘には拳大～人頭大よりやや小振りの石を貼り付け、一部石列が認められた。この発見により、前述した新井遺跡や上屋敷遺跡との関連性が窺われる。

新井三嶋谷遺跡の西方に位置する丘陵尾根上に存在した新井32号墳下（68、消滅）からは、弥生時代後期と推定される木棺墓2基を検出している。これに隣接した新井51号墳からは（68、消滅）、弥生時代後期の甕・器台の口縁部を検出し、墳墓の存在が想定される。

このほか、新井三嶋谷遺跡の西方約4kmに在る本庄古墳群（4）中からは、後期段階^{註3}の貼り石を伴う墳丘墓を2基確認しており、今後、分布調査等による精査が必要となってくるだろう。

その他、小田川下流域^{かみたゆうだに}の上太夫谷遺跡（8）からは、弥生時代後期と推測される竪穴住居跡・木棺墓群が検出されている。

古墳時代に入ると多くの古墳群が形成され、町内では約450基の古墳や20余基の横穴墓を確認している。20余の古墳群の中でも蒲生川下流域の新井古墳群（68）は71基、小田川下流域



- | | | | | |
|------------|-------------|--------------|---------------|-------------|
| 1 弥長古墳 | 16 広庭遺跡 | 31 浦富古墳群 | 46 岩井廃寺下層遺跡 | 61 岩井荒神下古墳群 |
| 2 小畑古墳群 | 17 院内古墳群 | 32 岩美病院裏横穴墓群 | 47 岩井廃寺跡 | 62 岩井南塚古墳 |
| 3 平野古墳群 | 18 院内岡畑遺跡 | 33 新井第1遺跡 | 48 岩井大野古墳群 | 63 岩井奥山古墳群 |
| 4 本庄古墳群 | 19 長郷遺跡 | 34 熊井古墳群 | 49 長谷聖塚古墳群 | 64 恩志奥の谷古墳群 |
| 5 太田古墳群 | 20 長郷猪ノ谷古墳 | 35 牧谷横古墳群 | 50 鳥越沢尻遺跡 | 65 坂上古墳群 |
| 6 満願寺谷古墳群 | 21 柿ヶ谷横穴墓 | 36 牧谷横穴墓群 | 51 銀山女郎谷遺跡 | 66 恩志古墳群 |
| 7 高野坂古墳群 | 22 岩常城山古墳群 | 37 牧谷下竹類古墳 | 52 銀山真教寺遺跡 | 67 新井三嶋谷遺跡 |
| 8 上太夫谷遺跡 | 23 岩常猪ノ谷古墳群 | 38 高山上猫山古墳群 | 53 洗井藤助谷遺跡 | 68 新井古墳群 |
| 9 上ミツエ遺跡 | 24 宮の前遺跡 | 39 高山狭間遺跡 | 54 山ノ神古墳群 | 69 上屋敷遺跡 |
| 10 高住古墳群 | 25 福石遺跡 | 40 高山上ノ山古墳群 | 55 山ノ神遺跡 | 70 新井遺跡 |
| 11 東森谷遺跡 | 26 横座古墳群 | 41 恩志寺山古墳群 | 56 蒲生古墳群 | 71 二上山城跡 |
| 12 長郷古墳群 | 27 浦富日ヶ崎古墳群 | 42 宇治姥ヶ谷古墳群 | 57 馬場古墳群 | |
| 13 池谷古墳群 | 28 岩本古墳群 | 43 宇治宮下屋敷古墳群 | 58 真名古墳群 | |
| 14 池谷粉山古墳群 | 29 岩本横穴墓群 | 44 宇治市浜衛谷古墳群 | 59 真名遺跡 | |
| 15 延興寺城山古墳 | 30 坊谷横穴墓群 | 45 岩井宮の谷古墳群 | 60 岩井太郎右エ門古墳群 | |

第1図 岩美町遺跡分布図

の高野坂古墳群（7）は35基（横穴墓を含む）、と数の上でも群を抜いている。現在のところ、町内の古墳で確認されているもののうち、前期・中期に該当するものは少ない。

最も古い段階の古墳は、今のところ、新井古墳群の新井三嶋谷遺跡^{みなみだに}南谷3号墳で、4世紀後半代に位置づけられる。同墳は、副室を持つ石棺を内封する古墳として特筆される。^{註4}これに続き、数多くの古墳の造営が周辺の丘陵上に展開したものと考えられる。

確認されている古墳の多くは、古墳時代後期即ち6～7世紀にかけて営まれ、横穴式石室を内部主体とするものである。その特色の一つとして、小畑1号墳（2、穴観音古墳）^{おぼたけ}の石室長11.3mを始め、満願寺谷1号墳（6）の同10.7m、弥長古墳（1）の同10.2mなど10mを超える狭長な石室を持つものが知られている。これらの石室の多くは、玄室天井の一部を一段高く架構する所謂中高式天井^{なかだかしき}を採用しており、千代川以東に見られる通有な形態である。高野坂8号墳（7）は、中高式天井を有するものの中では最も古い様相を示し、6世紀後半代の築造である。

この地域は、横穴式石室に家型石棺を内蔵していることでも知られる。鳥取県内で確認されている家型石棺は11例を数えるが、この内5例が岩美町内に所在している。^{註5}町内の家型石棺は、高野坂古墳群で3例、満願寺谷古墳群中より2例確認されている。なかでも高野坂10号墳の家型石棺は、蓋の屋根部分が厚く作られ、縄掛突起を6個有しており、6世紀後半代のものである。出土遺物として忍冬文をあしらった銅製壺型鏡^{あぶみ}・帯金具などの優品が見られ、二段築成の方墳^{註6}ということを考え合わせて注目されることである。

高野坂古墳群から小田川を挟んだ対岸の丘陵部^{ぶくいし}に福石遺跡（25）があり、陶棺を出土している。陶棺は、高野坂古墳群の後背地に当たる福部村蔵見3号墳^{註7}からも出土している。このことは、陶棺が多く見られる岡山県美作地方との関わりが推察される。

そのほか、浦富海岸砂丘上に営まれた浦富3号墳（31）は、安山岩の柱状石^{註8}を立て並べて構築した箱式石棺を有する横穴式石室である。その石棺の構造は、玄門小口の板石閉塞による横口構造をとることと、象眼太刀を出土したことで注目される。また、石室は平天井構造を呈し、高野坂古墳群、平野古墳群（3）、小畑古墳群（2）^{おぼたけ}などが中高式天井を採用する中で異質な存在である。

奈良時代に入ると、蒲生川中流域右岸の沖積平野に岩井廃寺（47）が営まれる。岩井廃寺は、白鳳時代後期の法起寺式伽藍配置をとったものと推定され、寺域内にある岩井小学校には通称鬼の腕と呼ばれる塔心礎が、その当時の面影を今に伝えている。

高野坂古墳群の東側に位置する上ミツエ遺跡（9）、上太夫谷遺跡（8）からは、掘立柱建物跡とともに多量の円面硯・転用硯や、轡羽口・鉄滓・銅滓等^{ほったてばしら}を出土している。また、これより3km上流の小田川支流、荒金川右岸域に広庭遺跡（16）^{ひろにわ}がある。同遺跡からは、規格性を持った掘立柱建物跡が検出され、転用硯や瓦片の出土をみたことで、上ミツエ遺跡・上太夫谷遺跡等と併せて官衙的な性格が指摘される。

このほか土地制度の痕跡である条里制の方格地割が、河崎、本庄、広岡、高山など河川下流

域の沖積平野にみられる。

南北朝時代は、^{ぶんな}文和年間（1352～1355年）に山名氏が二上山（71）に因幡国守護所を置いたことで知られる。前述の上ミツエ遺跡は、この時期に該当すると考えられる青磁・白磁・^{てんもくちやわん}天目茶碗などの陶磁器類を出土しており、岩常地区周辺の広い範囲で遺構の存在が推定される。

その他、町内には60を超える^{じょうさい}城砦が確認されており、戦術的な山城として機能していたものと思われる。（松本）

参考文献

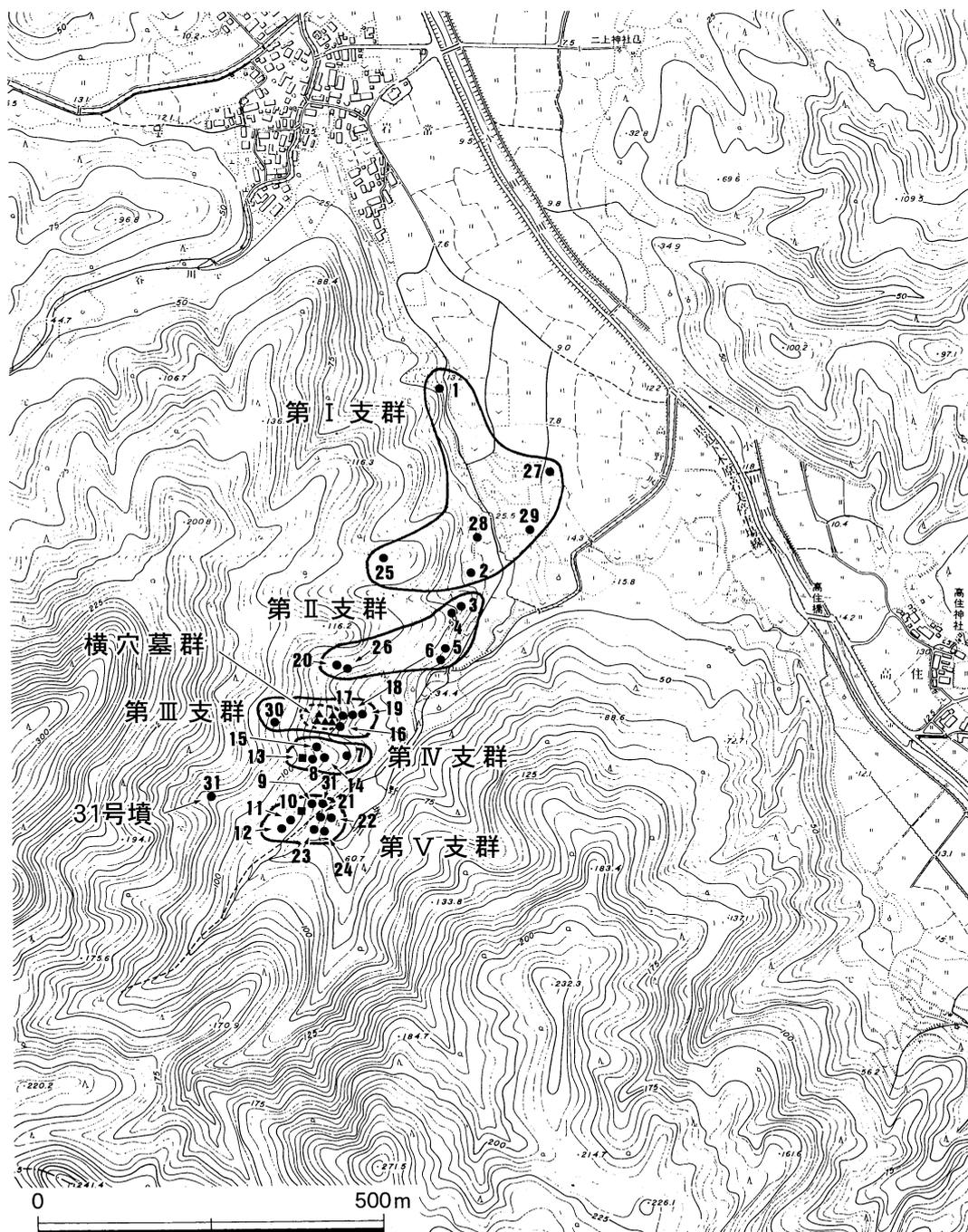
- 新井 51 号墳「岩美町教育委員会」1986 年
- 新井 32 号墳「岩美町教育委員会」1987 年
- 浦富 3 号墳発掘調査報告書「岩美町教育委員会」1988 年
- 上ミツエ遺跡発掘調査報告書「岩美町教育委員会」1987 年
- 広庭遺跡発掘調査報告書「岩美町教育委員会」1989 年
- 山ノ神 5 号墳発掘調査報告書「岩美町教育委員会」1991 年
- 高野坂古墳群発掘調査報告書「岩美町教育委員会」1992 年

- 註 1 縄文中期の可能性もある。土器片が細片なので、断定できない。
- 註 2 三嶋谷 1 号墳丘墓は、貼り石の状況から^{よすみとっしゅつがたふんきゅうぼ}四隅突出型墳丘墓であるとする意見もある。
- 註 3 ^{くのう}九重段階の弥生土器片が採取されている。山柗雅美氏教示。
- 註 4 副室を持つ例として、奈良県・和歌山県各 1、岡山県北部地域に 3 例存在する。岡山理科大学、助教授 亀田修一氏教示。
- 註 5 岩美町浦富 2 号墳の家型石棺も従来は含まれていた（『鳥取県史』1 原始古代編 P 288、図 103 所収浦富石棺）が、1995 年の山陰考古学研究集会の折、その範疇に含まれないことを確認した。『高野坂古墳群発掘調査報告書』1992 年、P 142 の鳥取県内出土畿内系家型石棺一覧表から削除する。
- 註 6 高野坂 10 号墳は 1987 年の調査で、残存する石列の状態より方墳としている。その後の調査例で、国府町梶山古墳は前面に方形壇を付設する石垣と外護列石により造られた、変形八角形墳であることが判明している。また、^{しび}鮪付き陶棺を出土した福部村蔵見 3 号墳も八角形墳を採用している。これら周辺地域と、今回の高野坂 31 号墳が方形壇を有することなどを考えると、10 号墳も方形壇を備えた多角形墳であった可能性も十分考えられる。墳裾の列石が西側で西方へ若干傾いて伸びていることや、奥壁の石列がやや弧を描くように配置されていることなど、方墳と考えた場合やや不自然ではなからうか。前面の方形壇については、該当する地点の調査が行われていないので想像の域を出ない。
- 註 7 高野坂古墳群の南縁を蔵見越しと呼ばれる旧道が通っているが、これを越えた福部村蔵見地区には、^{しび}鮪付き陶棺を出土した蔵見 3 号墳が存在する。
- 註 8 蒲生川下流域では、柱状石を古墳の埋葬施設に利用する例がいくつかみられる。いずれも消滅した新井 1 号墳、新井 51 号墳、新井三嶋谷遺跡南谷 5 号墳などが見られた。

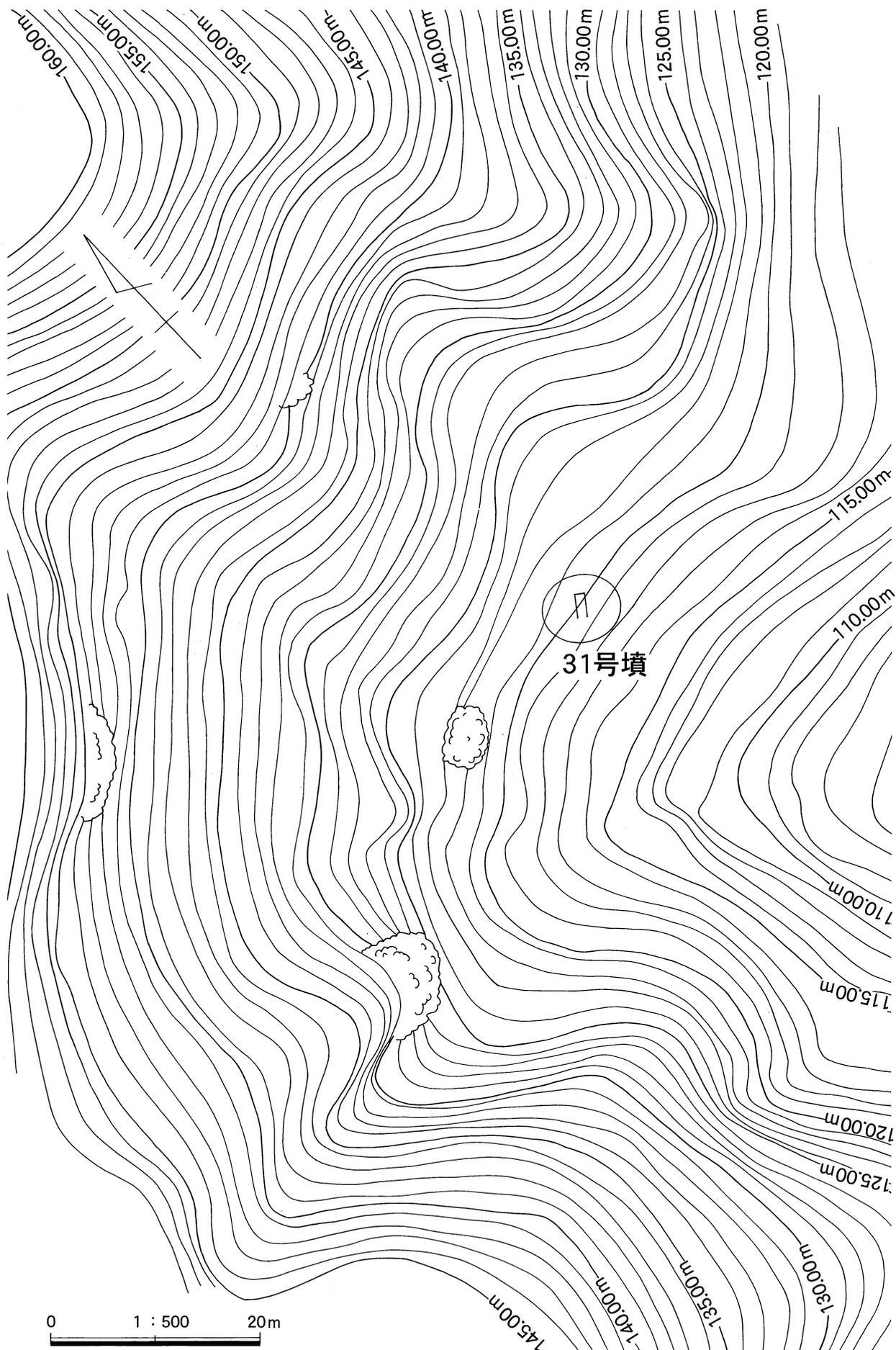
第3章 調査の結果

第1節 高野坂31号墳の概要 [第1・2図、図版1～9]

今回調査した31号墳は、二上山（標高320m）山麓に展開する高野坂古墳群中に所在する。



第2図 高野坂古墳群全体図（支群構成図）



第3图 高野坂31号墳周边地形图

高野坂古墳群全体図（第2図）に示したように、古墳群が形成されている谷の一番奥まった地点、第V支群の西側に位置する。北東側に派生する尾根の東側斜面に造営され、古墳群中最も高位置で標高約120mを測る。

高野坂古墳群周辺の山裾は、かねてより畑地として利用され、31号墳周辺も例外に漏れず昭和20～30年頃まで耕作が行われていたようである。そのため、周溝と墳丘の大部分は削平を受けていたほか、石室の天井石は失われ、玄門部付近は大きく石材が倒壊していた。当初、石室は山の斜面を背にして等高線に対して直交して築造されているものと考え、トレンチを設定したが、調査を進めていく内に等高線に対して45度東に振って造られていることが判明した。

調査の結果31号墳は、横穴式石室を内部主体とし、その規模は残存する周溝を基準として計測すると、東西約9m、南北約7mを測るやや不整な円墳であることが確認された。また、石室前面には、人頭大～一抱え程ある石材を貼り付けた幅2m、長さ7m、高さ1.5mを測る方形壇を造り出していた。石室は南向きに開口しており、石材の位置、残存部等を考え合わせると無袖式の長方形プランを採用していると考えられる。また、石室内の床面を2面確認し、それに伴った棺台も検出した。

副葬品としては、須恵器（杯蓋・杯身・直口壺・横瓶）、土師器（壺）、鉄鏃がみられた。遺物の年代観から、31号墳は7世紀初頭～前半代にかけて、少なくとも2回の埋葬が行われたものと推測される。石室の構築方法は、石室が小型で、使用する石材が比較的小振りで扁平な割石を多用する点で、同古墳群中の20・26号墳と類似するものである。また、同じように方形壇を持つ、国府町梶山古墳かじやま^{註1}との関連も喚起されるところである。（松本）

註1 『史跡梶山古墳保存修理事業報告書』鳥取県国府町教育委員会 1997年

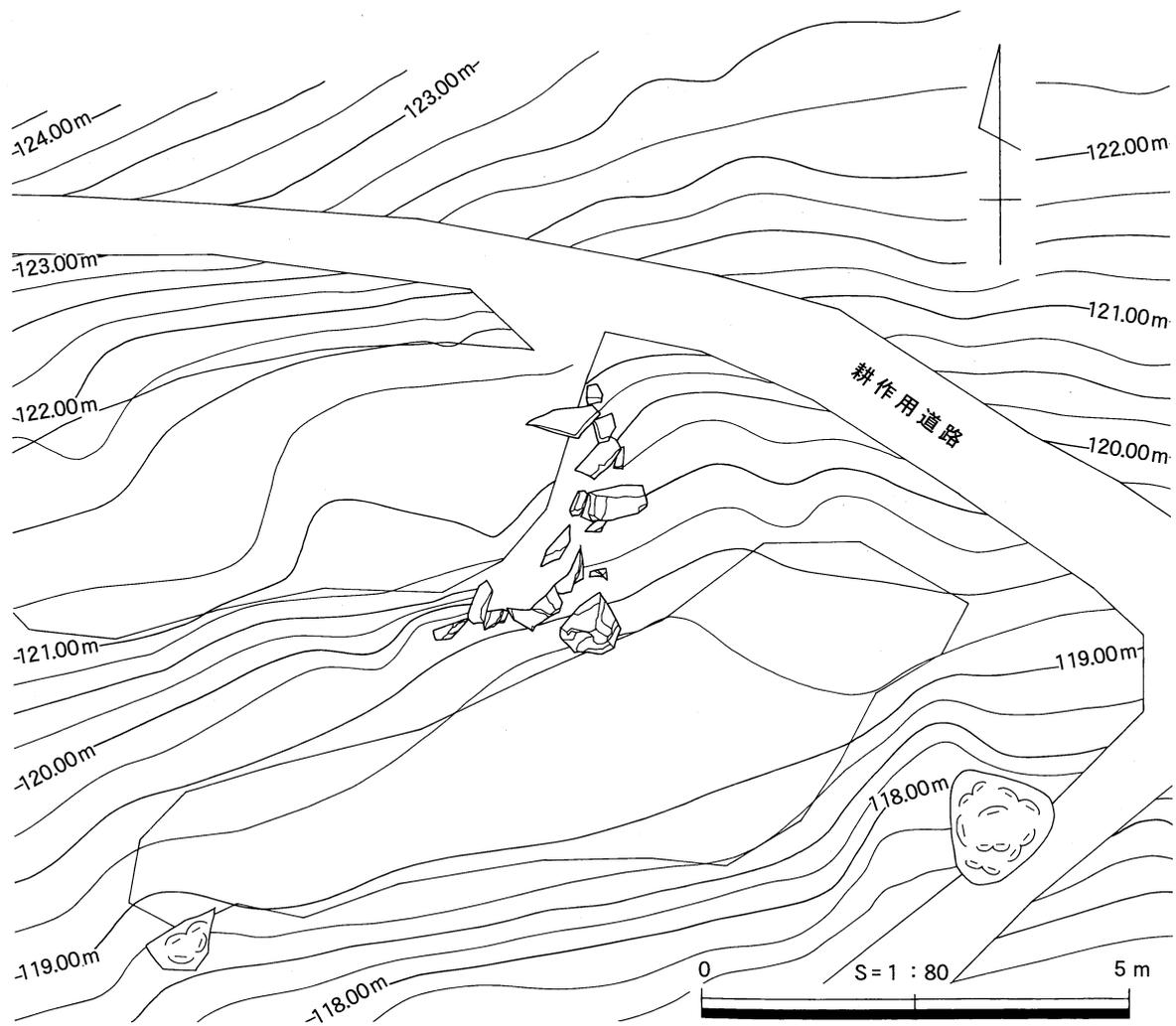
第2節 調査の概要

1) 墳丘 [第3・4・5図、図版1・6・7]

本墳は、標高117m～122mの丘陵斜面に立地している。本墳周辺の丘陵斜面は谷地形を成し、僅かな起伏を持った尾根（降棟状）が形成されている。その尾根上に高野坂31号墳が造営されていた。

本墳は、石室の主軸を斜面の等高線に対し約45度斜交して造られているため、地山整形は石室掘り形ほかたと周溝、および石室前面の方形壇に対して行われている。石室掘り形の平面形はU字形を成し、横断面は逆台形を呈している。掘り形の規模は長辺約5m、短辺約3.5m、深さ約1.4mを測る。石室の前面は、後世の開削により地形の改変を受けているため、不明瞭であるが約2m幅のテラス面（前庭部）が作られていたものと考えられる。このテラス面の前面に幅約2m、長さ約7m、比高差約1.5mの範囲で、人頭大～一抱え大の石材を積み上げた石垣を構築した方形壇が造られていた。

墳丘は、本墳が丘陵の約30度を測る急傾斜面に造られていたことと、後世の開削を受けてい

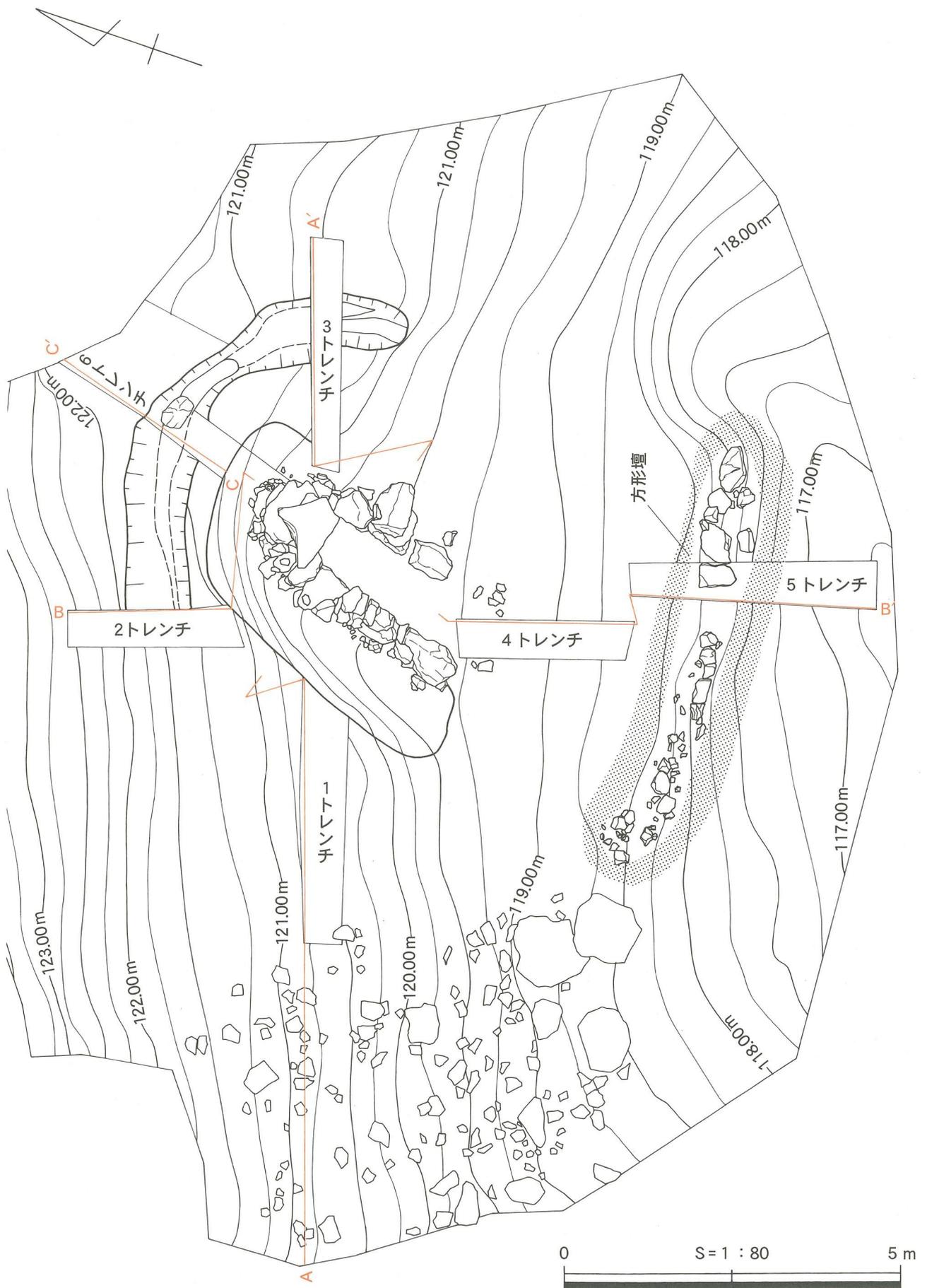


第4図 高野坂31号墳、調査前地形実測図

るため原型を復元することは困難である。しかし、周溝を成したと思われる溝状遺構や墳丘裾部の位置から見て歪な円墳であったと思われるが、方形墳もしくは多角形墳の可能性も考えられる。墳丘の規模は東西約9m、南北約7mを測り、その前面に方形壇が位置する。

墳丘盛土は、既に開削によってその殆どを失っていた。僅かに、石室周辺部において若干認められたに過ぎない。その範囲は、石室掘り形の上部と北側の周溝までの間に遺存していた。また、石室の西側では長さ約5m、幅約4m、厚さ約0.4mの範囲で遺存していることが確認された。

墳丘形成過程は、基本的には3段階に行われていたことが知られた。まず、石室の掘り形を斜面の等高線に対して斜行して掘り下げている。掘り下げた墓壇掘り形の底部の端部に、腰石を据え付けるためのU字形の窪みを設ける。次に、腰石・奥壁および側壁を2～3段構築する。



第5図 高野坂31号墳、調査後地形実測図

その後、側壁と天井石の架構に合わせて、掘り形の内部には裏込め土を施す。裏込めは、石室掘り形を掘り下げることによって出たと思われる褐色粘質土を用いている。最終段階として、天井石の最上段を架構して後墳丘に盛土を行い、古墳としての体裁を整えたものと考えられる。この墳丘形成過程の最終段階と並行して、若干の盛土を施した方形壇が造られたものと思われる。

墳丘裾部は前述した如く、開削により不明瞭である。しかし、西側に於いては丘陵斜面に散在する礫岩が途切れる部分が認められ、この部分が本墳の西側の裾部を成していると考えられる。東側でも、西側と同様な礫岩が散在していることが確認できた。本来、周溝の外側には礫岩が散在した状況であったと考えられる。この古墳周辺に見られる礫岩は、あたかも墳丘前面の方形壇と渾然一体化した情景を示していたものと思われる。(中野)

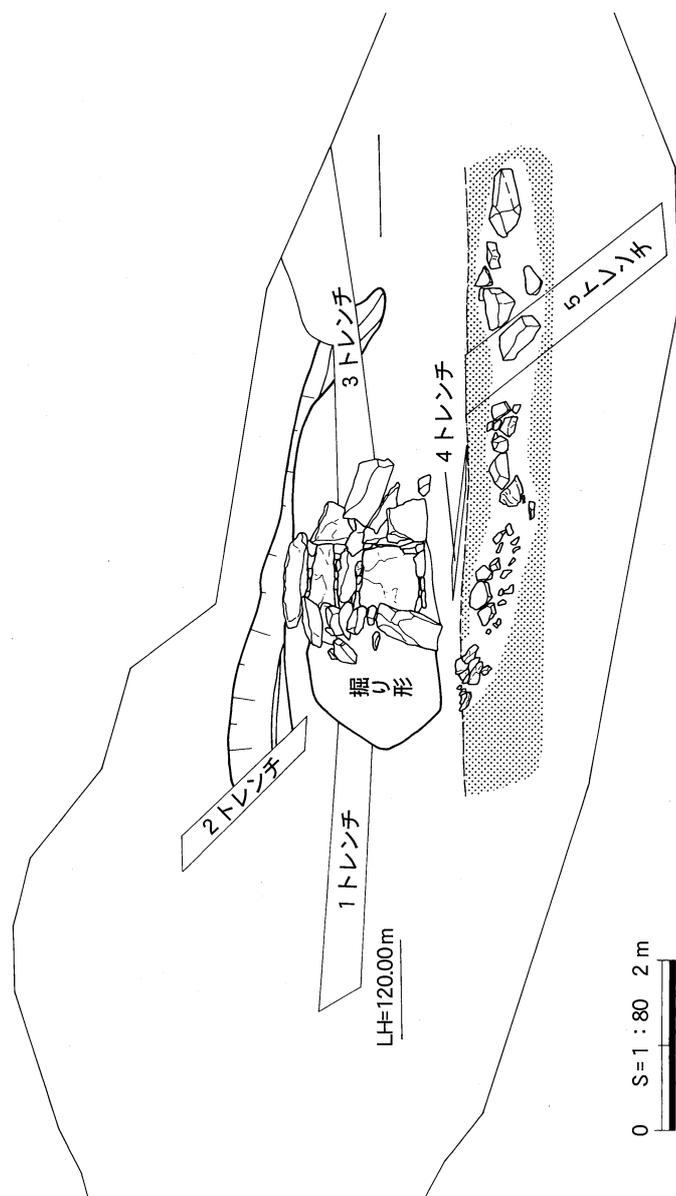
2) 石室 [第5・6・7・8・9図、図版1・2・3・5・6・7]

本墳の埋葬施設は、主軸をN 29° Eにとり、南に開口する単室の無袖型横穴式石室である。天井石は、奥壁側の一枚を除き既に無く、側壁も半壊状態であった。石室は、玄室の一部が遺存していたのみで、羨道、墓道、前庭部は開削により失っていた。

石室は「U」字形に掘り込まれた掘り形の内側に構築されていた。石室平面は、長方形の玄室に羨道を付けたものと考えられる。石室の全長は、右側壁で2.5 m、左側壁では3.35 mを測る。石室の各部を構成する石材は全て凝灰岩である。

石室掘り形 石室の掘り形は「U」字形に掘り込んでいるが、玄室の周りでは隅丸長方形を成す。

掘り形の規模は、東西約3.6 m (推定)、南北約5.1 m (残存長)を測る。石室はこの掘り形



第6図 高野坂31号墳、全体見透図

内に構築されているが、左側壁が掘り形の間余裕を持つのに対し、右側壁側では開削により殆どその痕跡を残していないが、その幅は狭かったものと考えられる。掘り形の断面形は逆台形を呈し、その深さは奥壁部で約 1.5 m、現開口部で約 0.9 mを測る。

石室内の床基底面は、ほぼ水平である。腰石・奥壁の配置に当たっては、その安定化のため、床基底面を一段深く掘り下げている。特に奥壁部が顕著で、深さ約 0.2 mを測る。

玄室 玄室長は、左側壁部で約 3.35 mが遺存している。玄室幅は、奥壁部で約 0.88 m、中央幅約 1.0 m、開口部で約 0.95 mを測る。玄室の側壁は、最も高い部分で床面から約 1.3 mを測る。

奥壁は、幅約 0.85 m、高さ約 0.9 mの扁平な石を立てている。左隅の逆「V」字形の隙間には小礫を詰め込んでいる。奥壁の上部には三段の石材が遺存していた。二段目の石材より、石室主軸方向に持ち送り気味に架構していた。三段目は、その持ち送り傾向が強い。最上段は、天井石を為している。各石材の間隙には、石材上端が水平を保つよう小礫を挟み込んでいる。また、石材後端部が下垂しないように小礫を裏込めしていた。

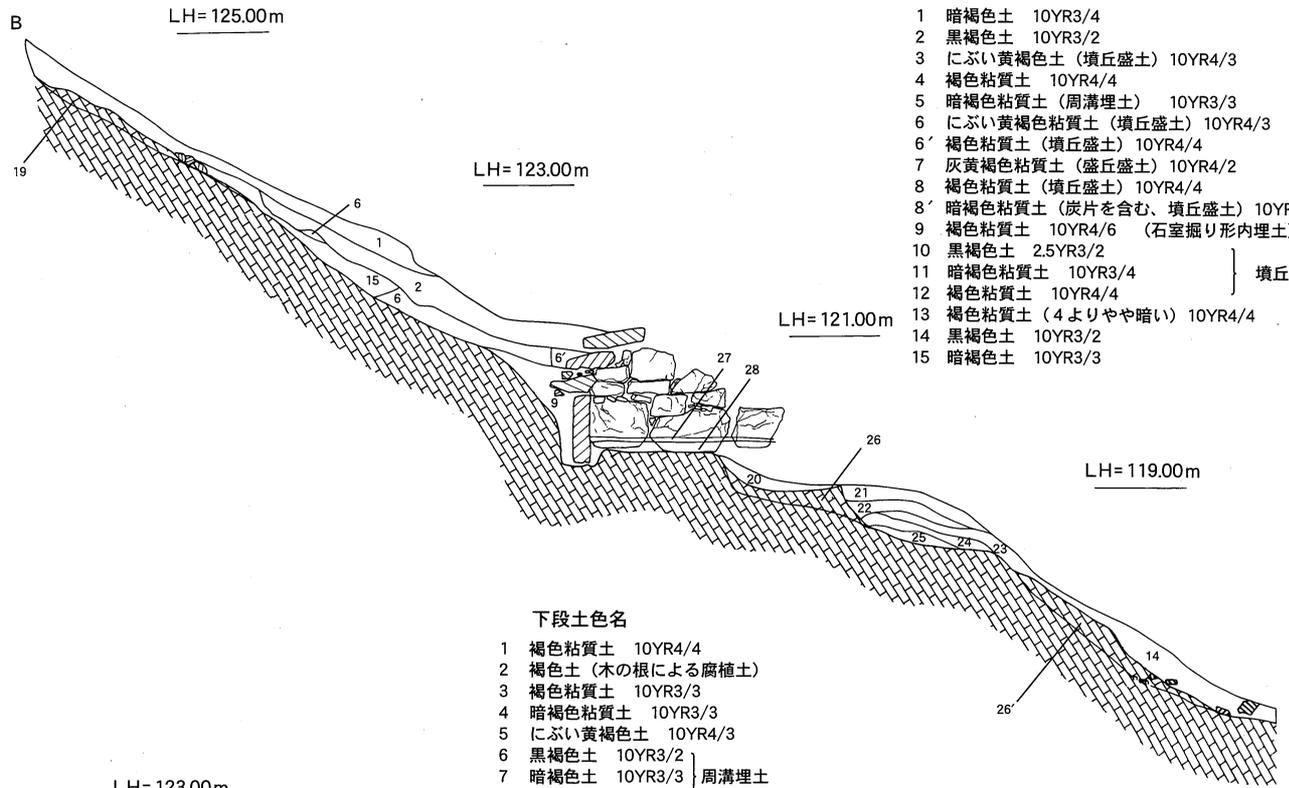
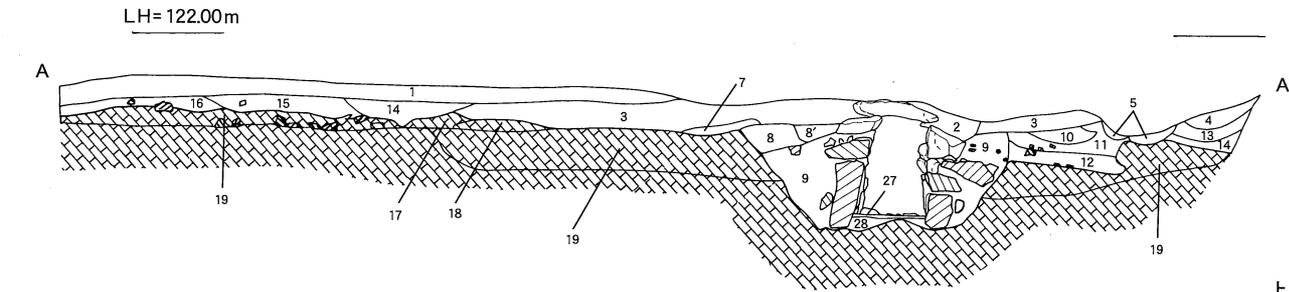
玄室右側の側壁は、基本的には三段の石材が構築されていた。腰石は 3 石確認された。中央部の腰石は横長で、奥側の凹部にやや長方形気味の石材を充填し、奥壁側の腰石の上端ラインの目地に揃えている。また奥壁側の腰石の上端部に於いても、水平方向の目地を通すため小礫を嵌め込んでいることが確認できた。二段目の石材上端部も、水平方向に目地を通していている。三段目の中央部は、中高部分に該当するため比較的大きめな石材を用いている。側壁全体から見ると水平方向の目地を通す部分は二カ所に認められる。しかし全長にわたる部分は、奥壁寄りの腰石上端部ラインのみである。

玄室の左側壁は、右側壁より比較的大きめな石材を腰石に用いている。奥壁寄りの側壁は二段に架構されている。腰石は、約 70cm 四方の石材を用い、二段目の石材上端部は、奥壁三段目を支えている。側壁中央部の腰石上部では、一・二段の比較的小振りな石材が遺存していた。腰石上部の側壁は、基本的には水平方向に目地を通して架構されていた。壁面は、左側壁は下端より上端に上がるに従って石室内面にせり出す。右側壁側は、石室掘り方内の裏込め土を失っているため直立気味であるが、本来は左側壁と同様、内面にせり出していたと考えられる。

玄室の平面形は、奥壁側が若干狭いが、腰石は直線的に配されており長方形を為す。現存する玄室の床面積は約 2.8㎡である。

玄室の床面は、地山面の上に、にぶい黄褐色土を敷き詰めて第一次床面としていた。更にこの上面に、黄褐色粘質土を敷き詰め第二次床面を形成していたことが確認された。床面には、棺台と考えられる扁平な石材が 7 石遺存していた。その内、5 石 (S 1 ~ S 5) は第二次床面の形成土に埋められていた。石室の主軸に斜交して位置する両端部の石材は、最終埋葬時に伴う棺台と考えられる。

本墳では玄門部に相当する部位は確認し得なかった。同様に、羨道・墓道および閉塞石は遺存していなかった。(中野)

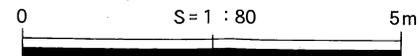
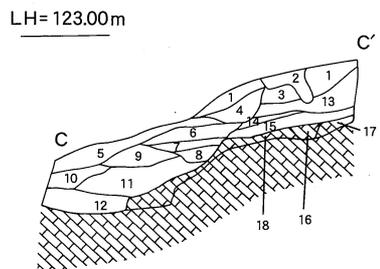


上・中段土色名

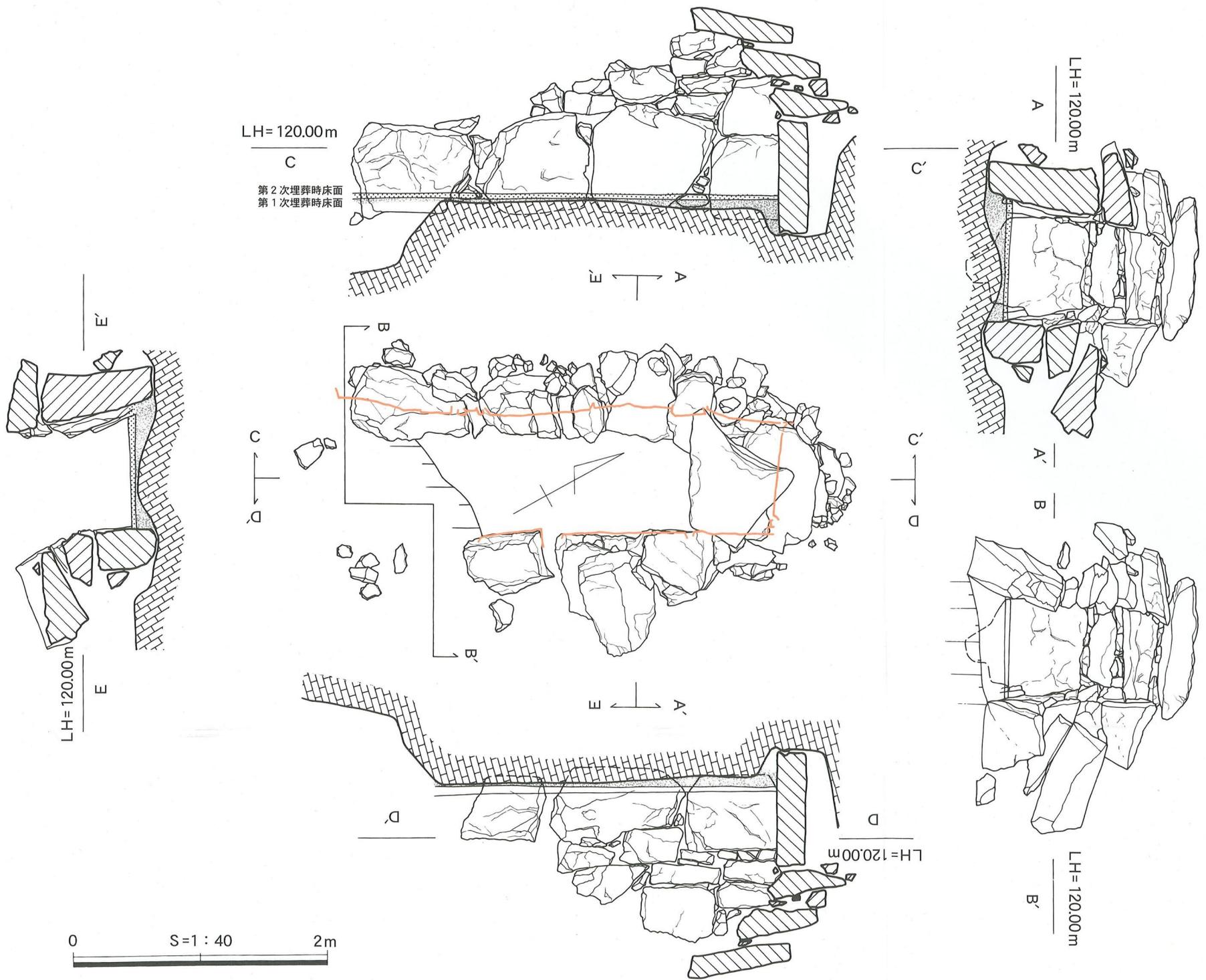
- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1 暗褐色土 10YR3/4 | 16 褐色土 10YR4/4 |
| 2 黒褐色土 10YR3/2 | 17 褐色土 10YR4/4 |
| 3 にぶい黄褐色土 (填丘盛土) 10YR4/3 | 18 にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3 } 地山 |
| 4 褐色粘質土 10YR4/4 | 19 黄褐色土 10YR5/6 |
| 5 暗褐色粘質土 (周溝埋土) 10YR3/3 | 20 にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3 |
| 6 にぶい黄褐色粘質土 (填丘盛土) 10YR4/3 | 21 暗褐色土 10YR3/3 |
| 6' 褐色粘質土 (填丘盛土) 10YR4/4 | 22 暗褐色粘質土 10YR3/3 |
| 7 灰黄褐色粘質土 (盛丘盛土) 10YR4/2 | 23 にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3 } 方形壇版築盛土 |
| 8 褐色粘質土 (填丘盛土) 10YR4/4 | 24 黒褐色粘質土 10YR3/2 |
| 8' 暗褐色粘質土 (炭片を含む、填丘盛土) 10YR3/4 | 25 暗褐色粘質土 10YR3/4 |
| 9 褐色粘質土 10YR4/6 (石室掘り形内埋土) | 26 褐色粘質土 10YR4/6 } 地山 |
| 10 黒褐色土 2.5YR3/2 | 26' 褐色粘質土 10YR4/4 |
| 11 暗褐色粘質土 10YR3/4 | 27 黄褐色粘質土 2.5Y5/3 (第2次床面埋土) |
| 12 褐色粘質土 10YR4/4 | 28 にぶい黄褐色土 5/4 (第1次床面埋土) |
| 13 褐色粘質土 (4よりやや暗い) 10YR4/4 | |
| 14 黒褐色土 10YR3/2 | |
| 15 暗褐色土 10YR3/3 | |

下段土色名

- | | |
|------------------------------|--------|
| 1 褐色粘質土 10YR4/4 | |
| 2 褐色土 (木の根による腐植土) | |
| 3 褐色粘質土 10YR3/3 | |
| 4 暗褐色粘質土 10YR3/3 | |
| 5 にぶい黄褐色土 10YR4/3 | |
| 6 黒褐色土 10YR3/2 | |
| 7 暗褐色土 10YR3/3 } 周溝埋土 | |
| 8 暗褐色土 10YR3/4 | |
| 9 黒褐色土 10YR3/2 | |
| 10 褐色粘質土 10YR4/4 | |
| 11 暗褐色粘質土 10YR3/4 | } 填丘盛土 |
| 12 褐色粘質土 10YR4/6 | |
| 13 にぶい黄褐色土 10YR4/3 | |
| 14 黒褐色土 10YR3/2 | |
| 15 黒褐色土 10YR2/3 | |
| 16 黒褐色土 10YR3/2 | |
| 17 黒褐色土 (岩礫を含む) 10YR3/2 } 地山 | |
| 18 褐色粘質土 10YR4/4 | |



第7図 高野坂31号墳、填丘断面土層図



第8図 高野坂31号墳、石室実測図

3) 石室内遺物出土状況 [第9図、図版4・8・9]

検出した遺物は、Po 6を除いて全て^{註1}玄室内からの出土である。石室内は、既に奥壁に架かる一枚を除き他の全ての天井石が失われていたほか、側壁の倒壊、土砂の流入によりかなりの攪乱が想定された。Po 7・8については、石材除去中、やむを得ず取り上げたが、原位置を保つものではなかった。

玄室内を掘り下げる過程で2面の床面を確認し、それぞれの床面に対応すると思われる遺物を検出した。図化(第10図)した遺物をレベル的に見ると、第一次埋葬時のPo 5・F 1と第二次埋葬時のPo 1・2・3・4・8に分かつことが出来る。若干浮いた遺物もあり、埋葬時の原位置を保つかどうかは疑わしいが、これらの遺物は、それぞれ第一次埋葬、第二次埋葬に伴う遺物と考えたい。

また、これらの遺物とともに棺台が検出されている。棺台のレベル、位置関係などを考えると、棺台S 1・S 2・S 3・S 4・S 5は第一次埋葬に、棺台^{註2}S 6・S 7は第二次埋葬に伴うものと推察される。第一次埋葬に伴うと考えられる杯身(Po 5)と鉄鏃(F 1)は、玄室ほぼ中央の棺台S 2・S 3・S 4・S 5に安置されたと思われる木棺の両脇から出土している。また、第二次埋葬に伴うと考えられる蓋(Po 1・2)、杯蓋(Po 3)、杯身(Po 4)、土師器壺(Po 9)は、玄室中央に位置する棺台S 6の周辺から出土している。(松本)

註1 Po 6は排土中から検出したもので、おそらく玄室掘り下げ中のものと思われる。

註2 S 6とS 7は対角線上に位置し、棺を安置するには不自然であり、2体同時に埋葬した可能性も考えられる。

4) 墳丘周辺の遺構 [第5・6・7図、図版6・7]

高野坂31号墳は、比較的急傾斜の丘陵斜面に立地していた。しかも、後世の開削・開墾等により、石室のみならず墳丘や周辺部の遺構が半壊状態であった。しかし、調査の結果、古墳に付属した以下の遺構が確認された。

周溝 墳丘の北側および東側部分に遺存していた。西側は、後世の開削により消滅したものと考えられる。周溝は、墳丘の周囲を前方が開き気味の馬蹄形に取り囲んでいたものと思われる。墳丘前面は方形壇が造られており、周溝はその両側部分に接続されていた可能性がある。方形壇の前面部は、丘陵斜面が連続しているため周溝は形成されていない。周溝の幅は東側の遺存部で約0.5 mを測り、浅い「U」字形の断面形をなす。石室背後の北側では、検出した上端部幅は最大約1.0 m、深さは最大約0.5 mを測り、「V」字形の断面形を呈する。周溝埋土は暗褐色土・黒褐色土の堆積が認められる。

周溝は、石室構築後に墳丘盛土が施されて後、盛土範囲の縁辺部に沿って掘り込まれて造られたものと考えられる。石室背後の墳丘断面を観察すると、周溝外縁には旧表土が認められる。しかし、内側では地山面を削平し石室を構築した後に墳丘盛土を施していたことが知られた。墳丘盛土も、周溝内縁部分に於いては斜め方向にカットされている感を与える。このため、周

溝は古墳築造の最終段階、墳丘の体裁が整えられた後に掘り込んで造られたものと考えられる。

方形壇 石室の前面に位置する。規模は全長約7m、幅約2mを測る。方形壇は、石室の主軸に対しやや斜交し、丘陵斜面の等高線に並行して造られていた。方形壇の前面には、人頭大～一抱え大の角礫を用いた石積みが見られ、遺存していた。石積みは原形を留めていないと考えられるが、遺存状況を見る限り、西側の石積み状況は比較的小さめな石材を用いるが、東側にいくほど大きめな石材を用いる傾向がある。これは、墳丘の東側が谷地形の中心部に向かっているため、方形壇の崩落を防ぐための措置と考えられる。石積みの高さは約1～1.5mを測る。

方形壇は、石室前面の地山面より約0.8mの厚さに盛土が施され、5層が確認できた。この盛土は、粘質を帯びた暗褐色土・黄褐色土・黒褐色土を互層にして突き固めて版築したもので、方形壇をより強固なものとしている事が窺われる。石積みは、概ね版築した盛土の表面に貼り付けて積まれていたが、中央部分の比較的大きめな石材は盛土中に埋め込み積み上げていた。この石材は、その主軸を垂直方向に施工するのに対し、他は水平方向に積まれている。この部分を境界に用いる石材の大きさを変えていることから、一種の施工単位を示していると考えられる。これによって、東側に一抱え大の石材を積むことにより、方形壇の石組みを強固なものにする措置となるものと考えられる。

その他に、調査区西側の丘陵斜面に石材が散在していることが確認された。この石材は、本来、丘陵斜面に一般的に見られるものである。従って、直接的には墳丘の外部施設には当たらないと思われる。しかしながら、石材の散布が墳丘部分に認められないことは、古墳の墓域内は意図的に除去されたものと考えられる。周辺部の石材は、墳丘前面の方形壇に接続しているため、古墳築造の際に周辺の景観も取り入れていたものと思われる。（中野）

5) 石室内出土遺物 [第9・10図、図版4・8・9]

古墳の玄室内より出土した遺物の内、須恵器^{すえき}8、土師器壺^{はじき}1、鉄鏃^{てつぞく}1の計10点を図化した。

図下した須恵器の内訳は、蓋^{つきふた}2、杯蓋^{つきみ}1、杯身^{ちよっこうつぼ}2、直口壺^{ちよっこうつぼ}1、直口壺の口縁部と思われる破片^{よこべ}1、横瓶^{よこべ}1である。

蓋 [第10図、Po 1・2]

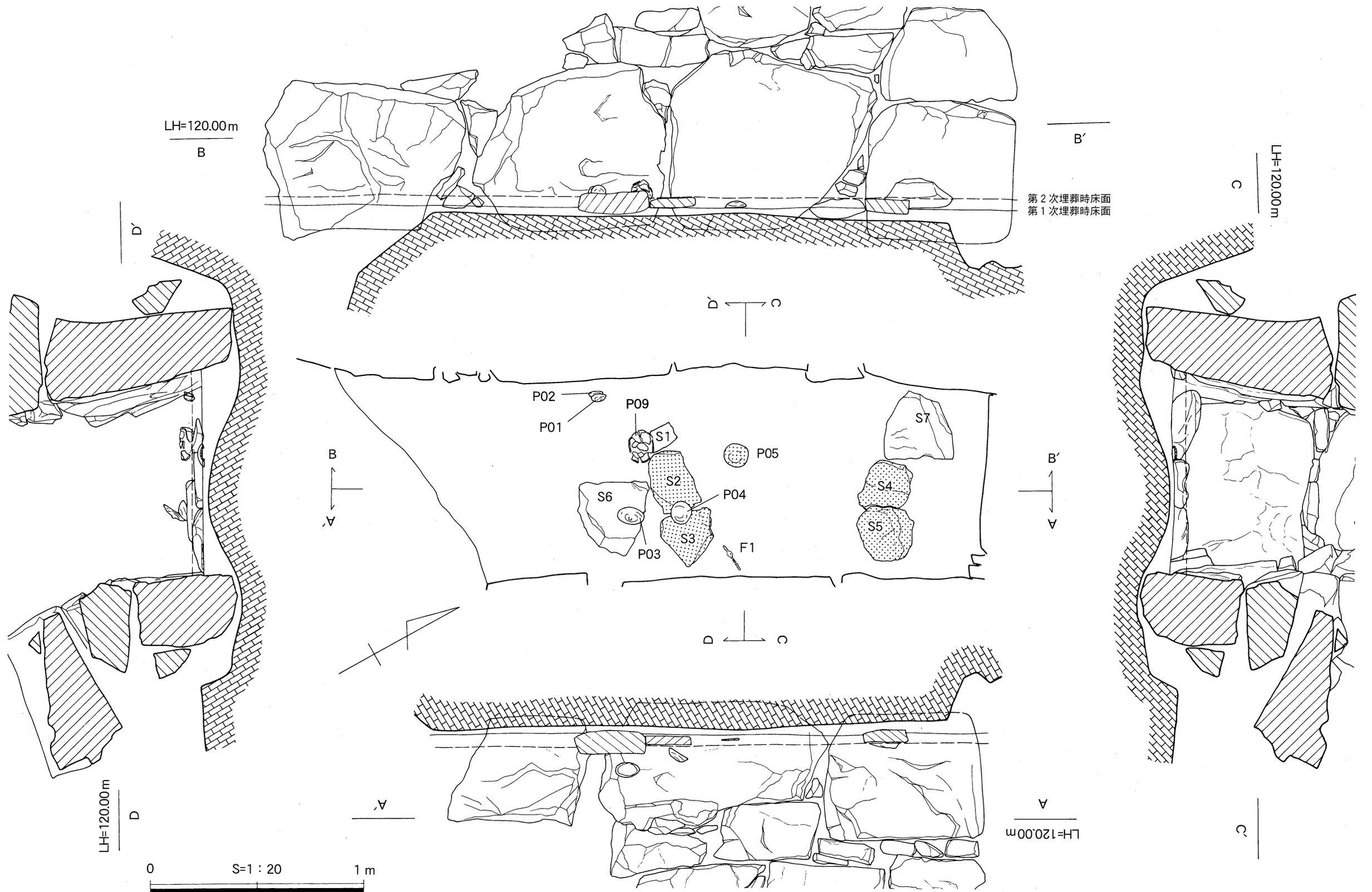
Po 1・2は、口径がそれぞれ5.0cm、8.8cmと小さく、ここでは壺の蓋として考えることとする。天井部はPo 2がやや扁平ではあるが、全体に丸みを帯びた形状で、口縁端部は両者とも先細り気味に納めている。Po 1は、天井部を手持ちによる荒いヘラケズリ、Po 2は右方向へのヘラケズリ調整を行っている。

杯蓋 [第10図、Po 3]

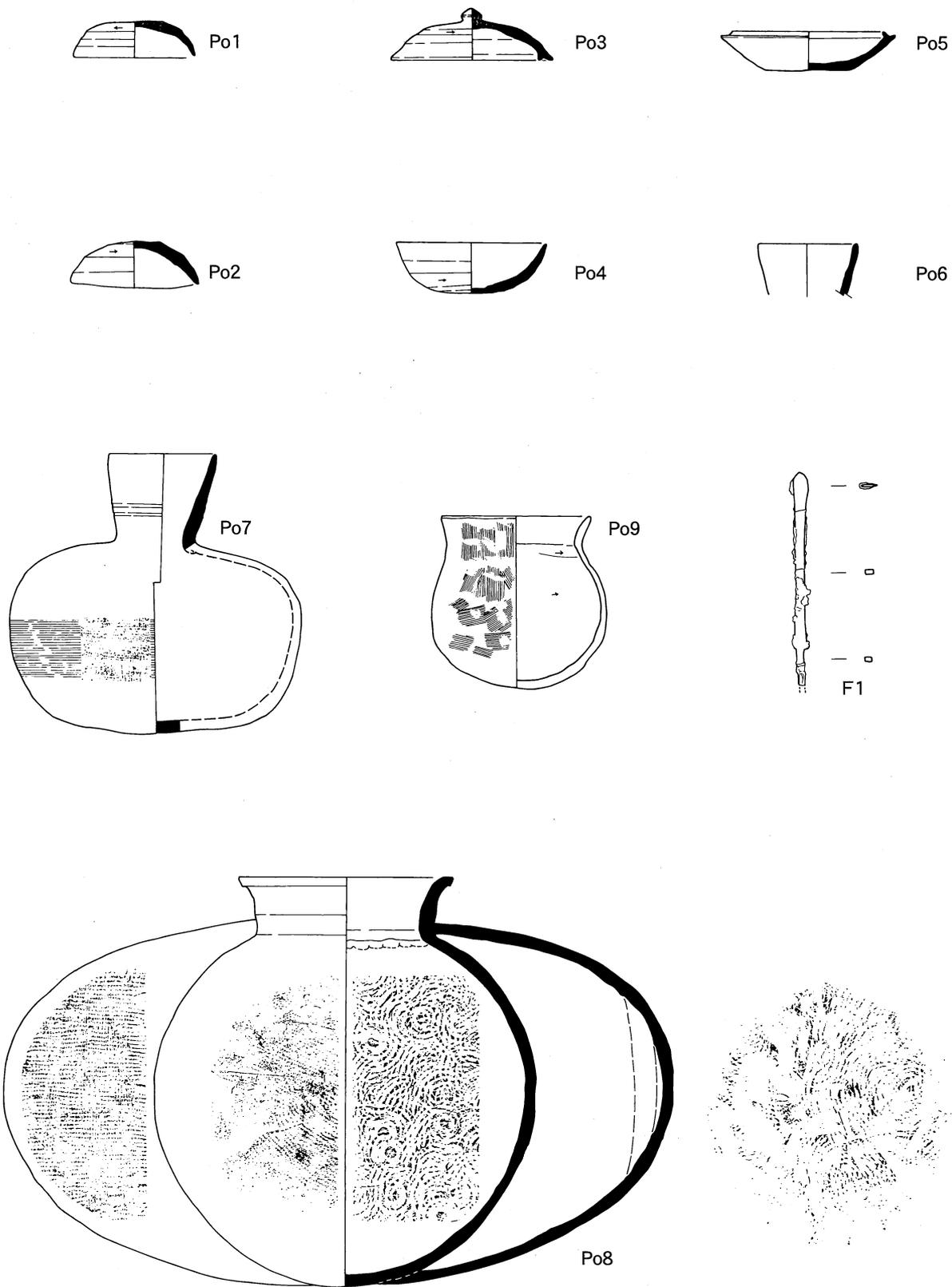
Po 3は、口端部内面に断面三角形の比較的小さなかえりを持ち、天井部には宝珠様つまみを付すものである。天井部は右方向のヘラケズリ調整している。

杯身 [第10図、Po 4・5]

Po 4は、かえりを有する杯蓋と同レベル、近位置で出土しているため、ここでは杯身として



第9図 高野坂31号墳、棺台・遺物出土状態図



第10図 高野坂31号墳、出土遺物実測図

考えることとする。全体的に丸みを帯びた形状で、口縁端部は先細り気味に納める。天井部は右方向のヘラケズリを行っている。一見すると、杯蓋のような感を与える。口径は9.8cmを測る。Po 5は、内傾する形骸化した小さい立上がりをも有するもので、消失する前段階のものである。底部は、ヘラ切り離し後未調整で、若干のナデを施す。口径9.6cmを測る。

直口壺 [第10図、Po 6・7]

Po 7は、やや胴部の張るもので、底部は偏平な形を呈する。Po 6も同種の直口壺の口縁部と考えられる。

横瓶 [第10図、Po 8]

Po 8は、胴部最大幅43cmを測る比較的大型のものである。口縁は、逆ハの字形を呈し、端部は面を持つ。

土師器・壺 [第10図、Po 9]

小型の丸底壺である。胴部は球形を呈し、口縁部は逆ハの字形で端部は丸く納める。全体的に歪な作りである。口径9.8cm、器高11.5cmを測る。

鉄鏃 [第10図、F 1]

長頸鏃群に属し、全長（残存長）14.1cmを測る。鏃身部は逆刺^{かえり}を持たない。鏃身の最大幅は1.1cmを測り、^{のかつぎぶ}篋被部との境が明瞭でない所謂^{のみせん}鑿箭式のものである。関は^{まち}銹のため明瞭ではないが、^{きよくまち}棘関を呈すると思われる。^{なかご}茎は先端部を欠損する。

以上、31号墳出土遺物について概述したが、詳細は観察表に委ねることとする。（松本）

第4章 総括

第1節 高野坂31号墳の墳丘と石室 [第2～8・11図、図版1～7]

高野坂31号墳は、二上山の南側丘陵斜面に所在し、標高約120m地点に立地している。

調査の結果、墳丘は後世の開削・耕作等により封土の大半が失われていたものの、墳丘前面には方形壇を付設していた事が判明し、墳形は不整な円墳であったと思われる。また、墳丘盛土の大半を失っているため、確定は出来ないが多角形墳であった可能性も看過できない。

本古墳は、逆W字形をなした谷部の中に、「降棟」状に伸びた尾根の稜線上に立地し、二上山の基盤層である凝灰岩の上面を覆っている褐色粘質土をベースとしている。このベースとなる黄色味を帯びた褐色粘質土の上面に黒褐色を呈した旧表土が形成されていた。旧表土は、周溝外縁の東側でその堆積が多くなる傾向を示すが、これは谷部の中心に向かっていているためと考えられる。

石室の構築に当たっては、まず始めに旧表土面よりU字形の墓壇掘り形が掘られる。掘り形は、丘陵斜面の等高線に対し、約45度の角度に斜交して掘り込まれている。この掘り形は、石材が構築される底部外縁部分は、床面より一段低く掘られている。特に、奥壁部分ではその掘り込みが顕著であった。掘り形内に、石材を一段ずつ積み上げて構築するが、奥壁最下部の石

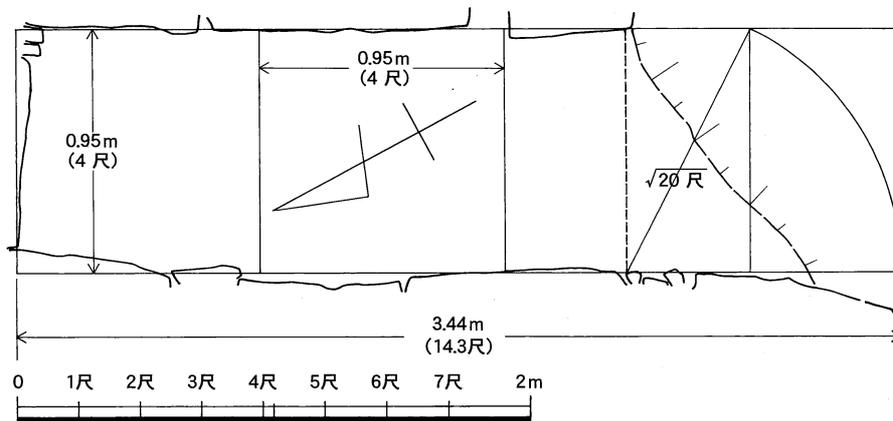
材は側壁部の腰石に挟まれるように据えている。掘り形の上端部は、石室の2～3段目の深さである。構築に際し、石材を一段据えるごとに裏込めが施されたものと考えられる。しかし、石室掘り形と構築された石材との間隙が狭く、裏込め土の観察が不十分であったため詳細は不明である。裏込めに用いられた埋土は粘質を帯びた褐色土で、石材を据えるごとに突き固めていったものと思われる。突き固めた裏込め土が石材の高さに近づくと、次の段が積み上げられていったと考えられる。裏込めを施す工程は、側壁部の最上段部分である3～4段目で終了する。石室構築の最終段階である天井石を架構した後、墓壙掘り形掘削時の排土を突き固めて石室をも覆い、第1次墳丘を築造したのと考えられる。その後、周辺部にも盛土を施し墳丘の体裁を整えたものと考えられる。

本古墳の石室は、高野坂古墳群中において最も小型の部類に含まれ、高野坂20・26号墳がこれに続く大きさである。本古墳は、後世の開削・開墾等で半壊状態であり、羨道部を欠失していた感を与えるが、前面の方形壇との間隙に余り余裕がないため、遺存していた石室はほぼ築造当時の姿であったと思われる。調査の結果、石室の残存長は約3.35m（側壁部の最大値は3.42m）、石室幅約0.9～1.0mを測る。石室幅の平均値は0.95mである。

ここで本古墳の築造に際し何らかの企画性が見いだせないか、少し検討してみたい。

築造時に用いられたと考えられる尺度として、晋尺（しんしゃく 1尺＝0.24m）と高麗尺（こまじやく 1尺＝0.36m）とが考えられる。石室幅の平均値との対比を見てみると、晋尺では約4尺（3.96尺）であるが、高麗尺の場合約2.6尺（2.64尺）である。同様に石室長をみると、晋尺では約14尺（13.96尺）を示し、高麗尺は約9.3尺（9.31尺）である。このように、高麗尺では半端な数値を示すことから、本古墳では晋尺を採用していたものと思われる。

本古墳の石室幅を基準にして石室長を求めると、石室幅1に対し3.5という数値が得られる。側壁部の最大残存長では1：3.6の比率を示す。この比率は「黄金截」、いわゆる黄金分割註1が用いられている事を示唆している。すなわち平面幾何で一つの外中比（1：1.618）に分けることによるものである。この比率によって求められる数値1.537mと石室幅を基準とした正方形の一辺の倍数1.9mを加えると3.44mとなり、側壁部最大残存長3.42mに近似する。



第11図 高野坂31号墳石室平面図形の企画

このように、本古墳の規模は、高野坂古墳群中であっては立地的に見ても、他と隔絶されたものとして捉えられよう。後述する出土遺物の様相や石室の企画性、墳丘に付属した方形壇の存在など、高野坂古墳群中に於ける本古墳の性格を物語るものといえよう。(中野)

註1 久松潜一・佐藤謙三編『角川国語辞典』 角川書店

「平面幾何で、一つの線分を外中比（1対1.618）にわけること。すなわち、小部分と大部分との比を大部分と全体との比に等しくなるように分割すること。たてとよこがこの比になるとき美しく感じられる。黄金律とも云う。」

第2節 高野坂31号墳の出土遺物について [第9・10図、図版4・8・9]

今回出土した遺物は10点にとどまり、石室内の状況から、後世に人為的に失われてしまった可能性も考えられる。羨道部および石室前面からの出土はみられず、追葬時の片付け、掻き出し等の痕跡は確認できなかった。

副葬品は須恵器・土師器・鉄鏃等で、耳環・玉製品等の装身具類は検出しえなかった。器種としては、杯身・杯蓋・蓋・横瓶・直口壺・土師器の壺など古墳時代終末期に見られる一般的なものである。

次に時期決定の指標となる杯身・杯蓋についてみてみたい。杯身は第一次床面よりPo5を検出している。これは短い形骸化した立上りを有し、消失する前段階のものと考えられ、陶邑編年に照らし合わせるとTK209型式、II型式6段階に相当する。また、第二次床面からは宝珠様つまみを付し、口端部内面にかえりを有する杯蓋Po3と、同レベルで近位置からPo4を検出している。当初Po4はその形態より杯蓋として捉えていたが、天井部にヘラケズリを施していることや、かえりを有する杯蓋Po3と一緒に出土していることから、同一セットと考えここでは杯身とした。これを陶邑編年で見ると、TK217型式、III型式1段階に相当するものとする。上記のように床面の数と須恵器の型式差が一致し、レベル的にも合致することで、高野坂31号墳は少なくとも2回2時期の埋葬が行われたことが推察された。実年代については諸説あると思うが、ここでは陶邑編年に準拠し、7世紀初頭に造営が始まり、7世紀前半代に2回目の埋葬が行われたものと考えたい。(松本)

註1 田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981年

註2 中村浩『和泉陶邑窯の研究』 柏書房 1981年

註3 樋口吉文「陶邑」『季刊考古学』42号所収 雄山閣 1993年

「ヘラケズリ調整が217号窯段階の窯跡では再度施工されていることが指摘される。」

註4 飛鳥・藤原宮の土器編年に即すると飛鳥IIに相当し、7世紀第2四半期となる。

第3節 まとめにかえて

高野坂31号墳は、7世紀前半代に築造された横穴式石室を内部主体とする古墳で、前面に石材を積み上げて方形壇を備えた特異な墳丘形態をとっていることが明らかとなった。方形壇を付属させる古墳は、全国的にも少なく10数例知られている程度である。鳥取県内では、国府町梶山古墳^{註1}、郡家町福本70号墳^{註2}で確認されている。墳丘前庭部に方形壇を構築する、所謂壇ノ塚式の墳墓は、終末期古墳に特徴的な墳丘形態である。

方形壇の変遷については、高野陽子氏の論考がある^{註3}。それによると、「7世紀中葉前半から後半にかけて、主墳丘の主軸に斜交して付設される方形壇→主墳丘に正面し、発達した石積みを持つ方形壇→規模が縮小し、主墳丘と一体化する傾向を見せる」という過程をとるといふ。これに照らし合わせると、高野坂31号墳は初期のものとして、福本70号墳・梶山古墳とともに提示されるものである。しかし、方形壇については、やらずれてはいるが、ほぼ主軸に対して正面に造られており（福本70号墳も同様）、必ずしも初期の方形壇を有する古墳が主軸に対して斜交させるとはいえないことを示している。梶山古墳が主軸に対して斜交した方形壇を有しているのは、墓道からの視覚を意識したもので、古墳の主軸に合わせると云った意識はなかったものと思われ、さらに主軸を南北方向にとることを強く意識した結果であると思われる。

また、墳形については、方形壇を有する古墳がいずれも八角形墳あるいは方墳に採用されており、31号墳の様に円墳に採用された例はない。しかしながら、31号墳は、墳丘の大部分が削平を受けており、方形壇あるいは多角形墳だった可能性も考えられることを明記しておきたい。

近年の調査で、近隣する国府町梶山古墳が石垣と外護列石により造られた変形八角形墳であり、また、福部村蔵見3号墳^{註4}も同様にトレンチ調査で多角形墳であることが確認されている。さらに郡家町福本70号墳も八角形墳で方形壇を付設する事が判明している。

高野坂古墳群中においては、10号墳^{註5}が石垣と外護列石が巡らされた方墳であることが知られている。方形壇については、調査区域外で未調査のため不明であるが、付設されていた可能性も考えられる。

このように、多角形墳あるいは方墳に方形壇を付設するという事例が、千代川以東に確認されてきている。これらの古墳の被葬者としては、その地域の首長級、あるいは中央政権に関わりのある者が考えられている。しかし、31号墳は古墳の規模・形態・副葬品をとっても、これらの条件は満たさないとわれ、このことはどのように解釈していったらよいのか今後の課題として類例の蓄積を待ちたい。また、天皇陵に先駆けて、方形壇を付設する方墳・多角形墳がこの地域で採用されたことの意味は大きく、上記のことと合わせて更により深い研究が必要である。

以上、若干の問題点を挙げたが、今回の調査で、古墳の調査は単に埋葬施設のみならず広範囲で考えられるべきであり、より広い視点での観察が必要であることを痛感した。今後の調査に役立てたいと思う。（松本）

註1 『史跡梶山古墳修理事業報告書』 鳥取県国府町教育委員会 1997年

註2 福本70号墳の報告書は未刊のため、現地説明会資料及び中野知照氏教示による。

註3 高野陽子「京都府山尾古墳」『後・終末期古墳の被葬者像』季刊考古学雄山閣 1999年

註4 『蔵見3号墳発掘調査報告書』 福部村教育委員会 1997年

註5 10号墳は方墳としているが、外護列石が西側で西方に若干角度を付けて伸びていること、奥の北側の石列がやや弧を描くように配置されてることなどから、方墳と考えた場合、不自然な部分もあり、多角形墳であった可能性も考えられる。今後、墳形の見直しも必要かと思われる。また、岡山理科大学、亀田修一氏は多角形墳の可能性を指摘されている。

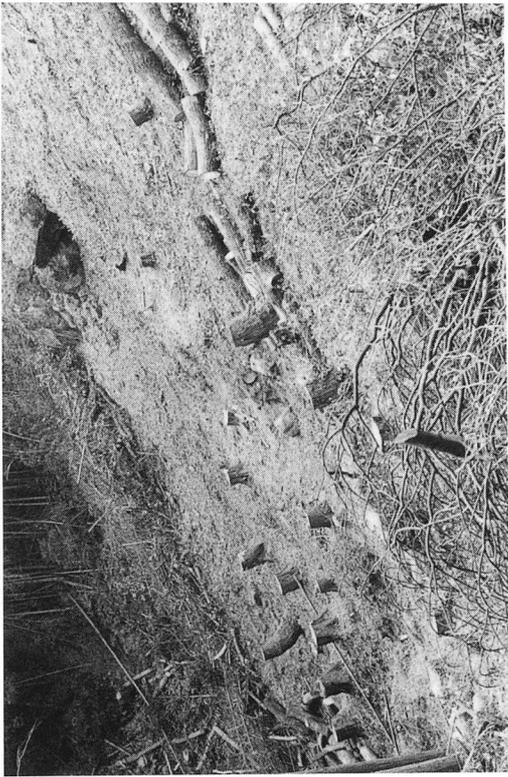
第1表 高野坂31号墳、出土遺物観察表

遺物番号 取上番号	出土 地点	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考	
Po01 No.06	玄室内	須恵器 蓋	口径5.0 器高2.4	小型の蓋で、天井部はやや偏平。口縁部は、端部で先細り気味に納める。	外面 天井部は、手持ちによる荒いヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 内面 ヨコナデ、中央部のみ仕上げナデ。	1mm程度の長石、石英を多く含む。	堅緻	灰色	亀裂あり	
Po02 No.07	玄室内	須恵器 蓋	口径8.4 器高3.1	小型の蓋で、全体的に丸みを帯びた形状を呈する。口縁端部で先細る。	外面 天井部右方向のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 内面 ヨコナデ、中央部は仕上げナデ。	1~3mm程度の長石、石英を多く含む。	堅緻	灰色	歪	
Po03 No.08	玄室内	須恵器 杯蓋	口径8.8 器高3.5	天井部に擬宝珠様つまみを付し、内面に小さなかえりを有する。	外面 天井部は右方向のヘラケズリ後ナデ、その他はヨコナデ。 内面 ヨコナデ、中央部は横方向の仕上げナデ。	1~5mm程度の長石、石英を含む。	堅緻	灰~青灰色		
Po04 No.09	玄室内	須恵器 杯身	口径9.8 器高3.4	全体的に丸みを帯びた形状で、口縁端部は、先細り気味に納める。口径は小さい。	外面 天井部右方向のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 内面 ヨコナデ、中央部のみ横方向の仕上げナデ。	1~3mm程度の長石、石英を多く含む。	堅緻	灰~青灰色		
Po05 No.14	玄室内	須恵器 杯身	口径9.6 器高2.6	偏平な底部よりなだらかに逆ハの字形に伸びる体部。受部は内傾する短い立上がり有する。	外面 ヘラ切り離し後若干のナデ、体部ヨコナデ。 内部 ヨコナデ。底部外面に工具痕か。多数の傷跡あり。	1~3mm程度の長石、石英を多く含む。	堅緻	灰色		
Po06 No.13	排土中	須恵器 壺口縁	口径6.3 器高3.4 (残)	ほぼ垂直に立ち上がる口縁で、端部は丸く納める。	内外面ヨコナデ。	1mm以下の砂粒を含む。	堅緻	灰色		
Po07 No.03	玄室内	須恵器 直口壺	口径7.0 胴部最大径19.1 器高13.5	横長で球状の体部を持つ直口壺。底部はほぼ平坦で、肩が張る。口縁に2状の浅い沈線を施す。	外面 口縁部ヨコナデ。体部カキメ後ヨコナデ、底部ヘラケズリ後ヨコナデ。 内面 ヨコナデ、底部横方向の仕上げナデ。	1~3mm程度の長石、石英を含む。	堅緻	灰~オリーブ灰色	肩部自然釉付着	
Po08 No.01	玄室内	須恵器 横瓶	口径14.0 胴部最大幅43.0 胴部最小幅25.0 器高24.0	大型の横瓶。口縁はハの字形を呈し、端部は面を持つ。胴部中央には、粘土継ぎ足し痕と巻き上げ痕が残り、製作工程が伺える。口縁部にも入念な指押さえあり。	外面 口縁部ヨコナデ。体部平行タタキ後、回転を用いたクシナデ調整。 内面 口縁部ヨコナデ、体部に丁寧な同心円文タタキ。	1mm程度の長石、石英を含む。	堅緻	灰色		
Po09 No.10	玄室内	土師器 壺	口径9.8 器高11.5	小型の丸底壺。胴部は球形で口縁は逆ハの字形に開く。	外面 口縁~胴部上半までタテハケメ、口縁部はナデ消す。胴部下半は斜め、横方向のハケメ。底部ナデ。 内面 口縁部、横方向のハケメ後ナデ。胴部、右方向のヘラケズリ後ナデ。	1mm以下の長石、石英を多く含む。	良好	明黄褐色	黒斑あり 歪	
遺物番号 取上番号	出土 位置	種類	全長 cm(残)	鎌身部			篋被部		茎部	重量 g
				平面形	逆刺	長さ×幅×厚さ	関	長さ×幅×厚さ	長さ×幅×厚さ	
F.1 No.15	玄室内	鉄鎌	(14.1)	鑿箭形	なし	1.8×1.1×2.0	棘関	9.9×0.6×0.4	(2.4)×0.45×0.3	10.9

報 告 書 抄 録

ふりがな	たかざかさんじゅういちごうふん							
書名	高野坂31号墳							
副書名	県営広域農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	岩美町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	中野 知照、松本 美佐子							
編集機関	岩美町教育委員会							
所在地	〒681-0003 鳥取県岩美郡岩美町大字浦富 675番地1							
発行年月日	2001年2月20日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		㎡	
<small>たかざか</small> 高野坂 <small>さんじゅういちごうふん</small> 31号墳	<small>とっとりけんいわみぐん</small> 鳥取県岩美郡 <small>いわみちょういわつね</small> 岩美町岩常 <small>たかざかぐち</small> 高野坂口895-81			35° 32′ 13″	134° 19′ 33″	19990620) 19991115	130	広域農道 整備事業 に伴う発 掘調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
高野坂 31号墳	古墳	古 墳	横穴式石室 方形壇 周溝	土師器・壺 須恵器・蓋 杯蓋 杯身 直口壺 横瓶 鉄製品・鉄鏝	古墳群の中 では、最も小規模 の古墳である が、方形壇を有 する。			

圖 版



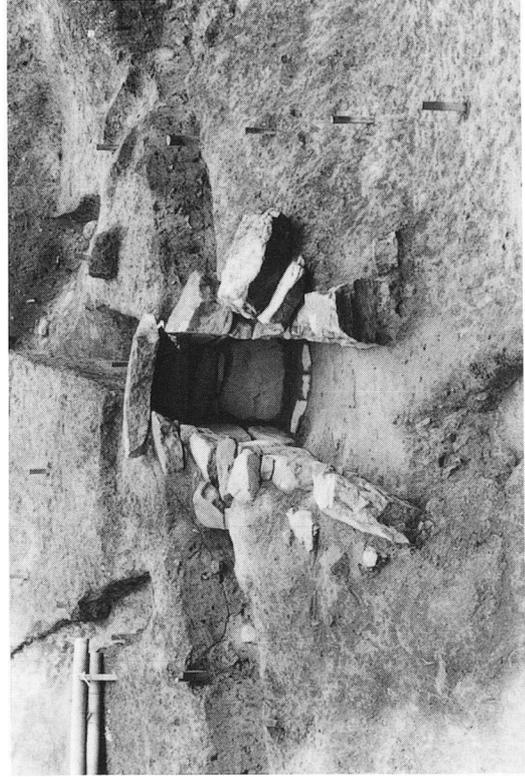
〔1〕 調査前全景（東より）



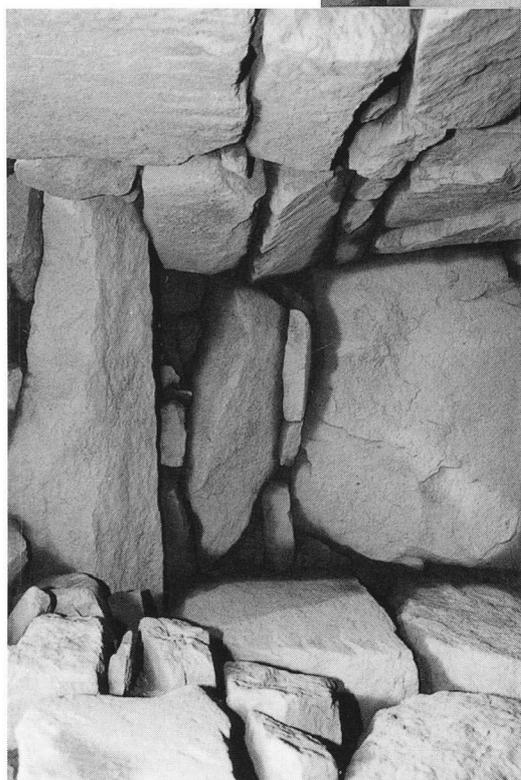
〔2〕 調査前 石材露出状況（南より）



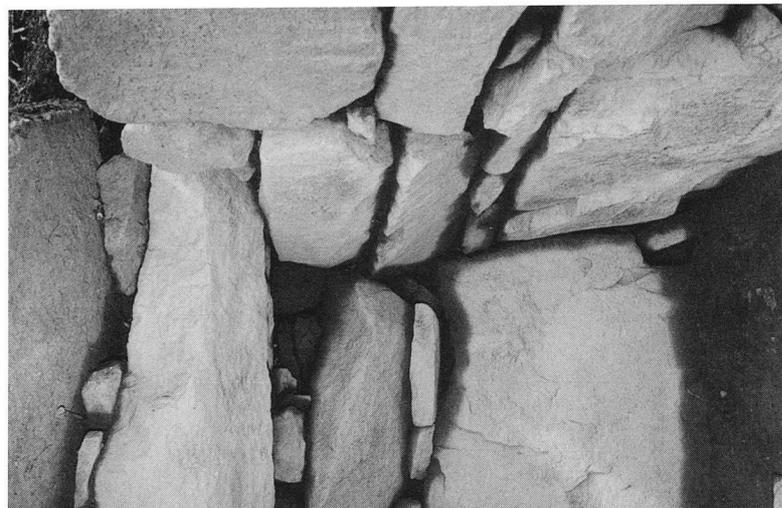
〔3〕 表土除去後 石室全景（南より）



〔4〕 石室全景（南より）



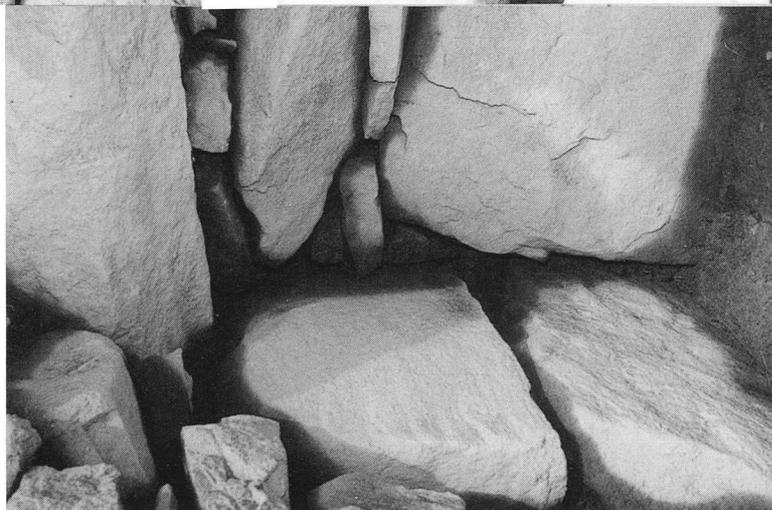
〔1〕 玄室奥壁 石積状況（南より）



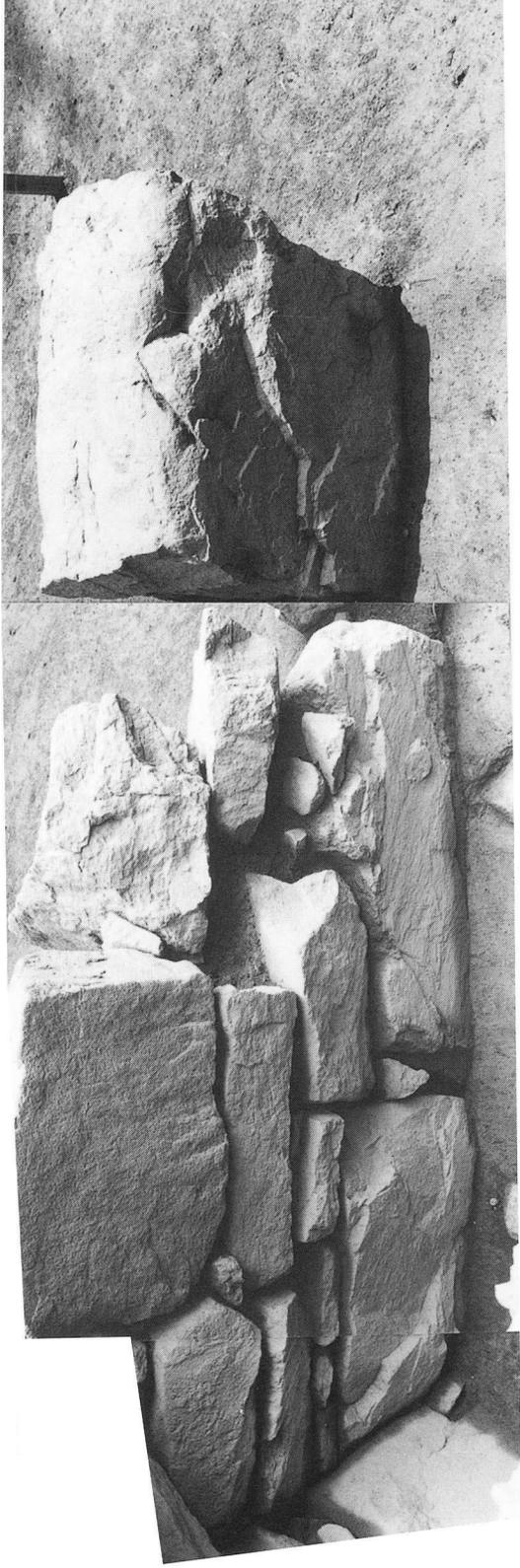
〔4〕 奥壁右隅石積状況（南より）



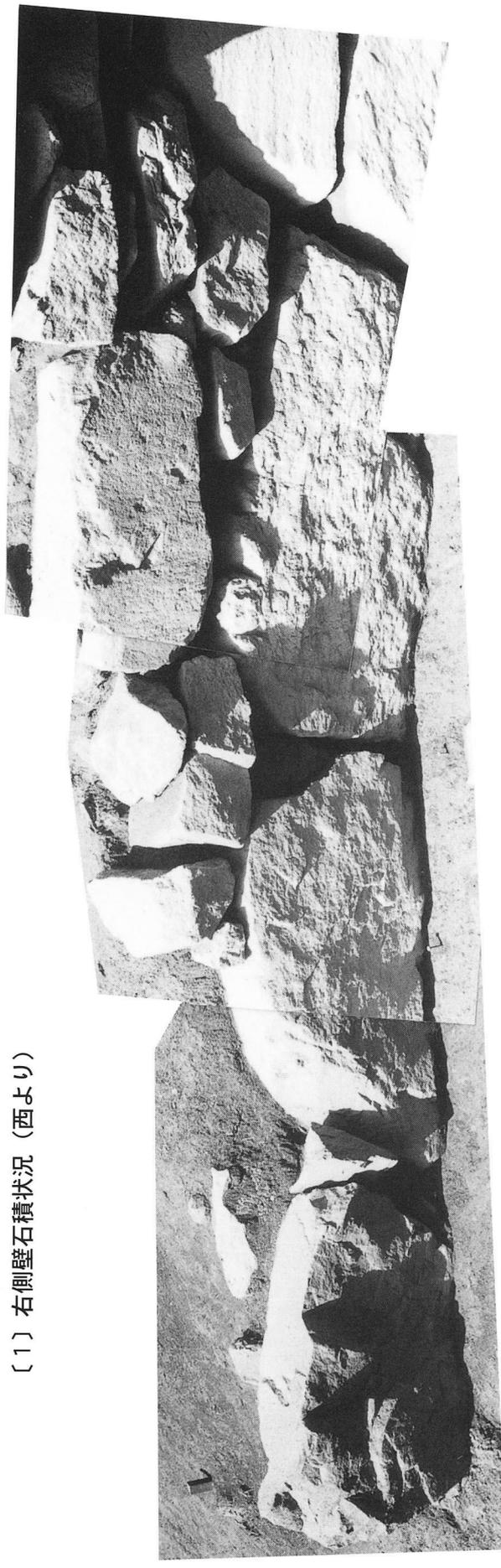
〔2〕 奥壁左隅石積状況（天井石を見上げる）



〔3〕 奥壁左隅石積状況（南より）



〔1〕右側石積状況（西より）



〔2〕左側石積状況（東より）



〔1〕 第1次床面遺物出土状況（南より）



〔2〕 第1次床面遺物出土状況（南より）



〔3〕 第2次床面遺物出土状況（南より）



〔4〕 第2次床面遺物出土状況（北より）

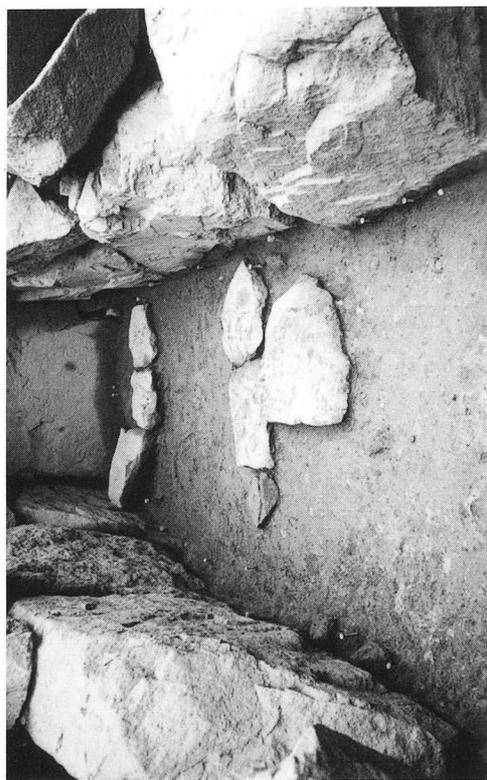


[2]

棺出土状況 (南より)



[1]



[3]



〔2〕腰石検出状況（南より）



〔4〕掘り形検出状況（北より）



〔1〕周溝検出状況（東より）



〔3〕腰石検出状況（北より）

方形壇検出状況



〔1〕 南東より

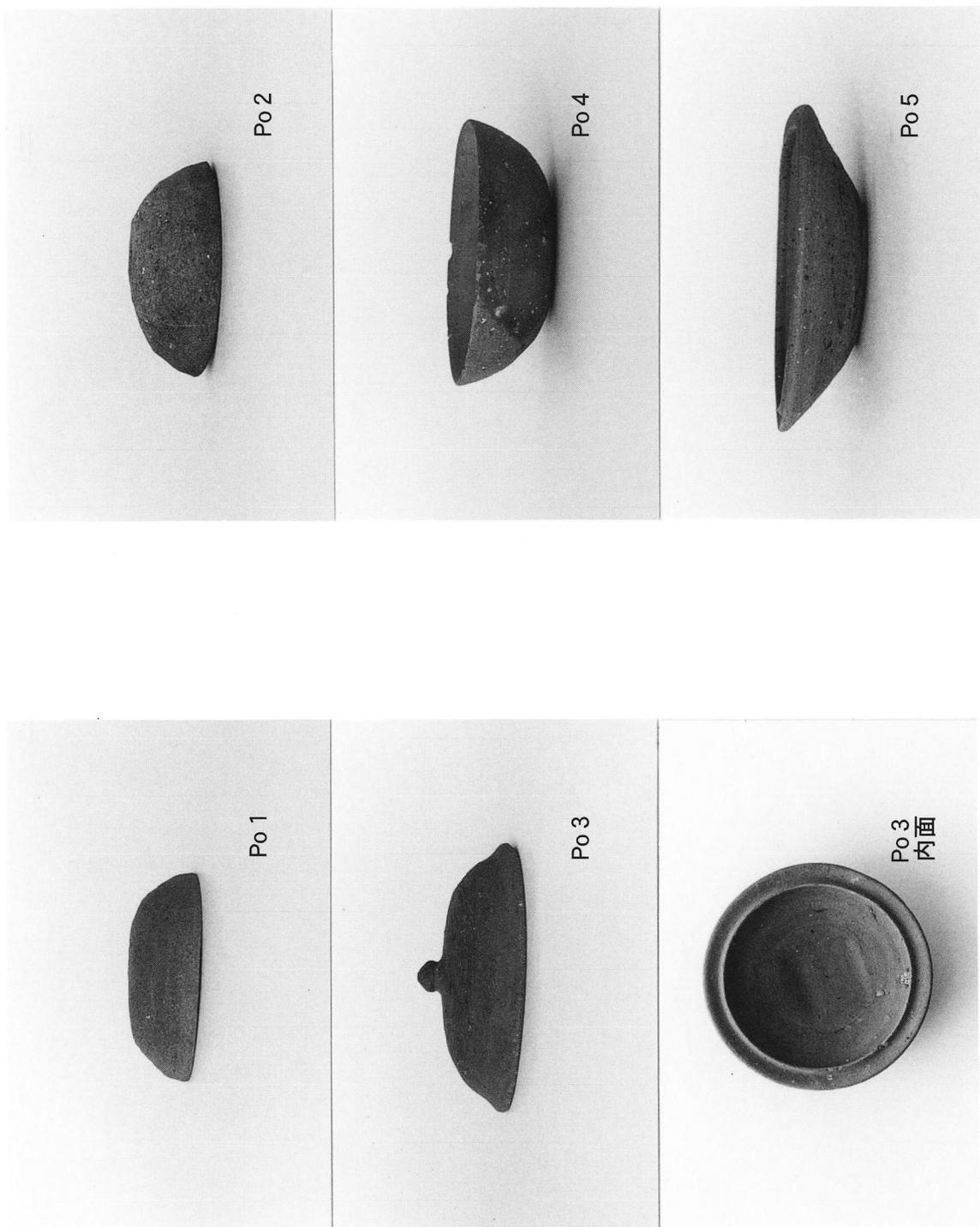


〔3〕 南西より



〔2〕 (南より)

图版 8



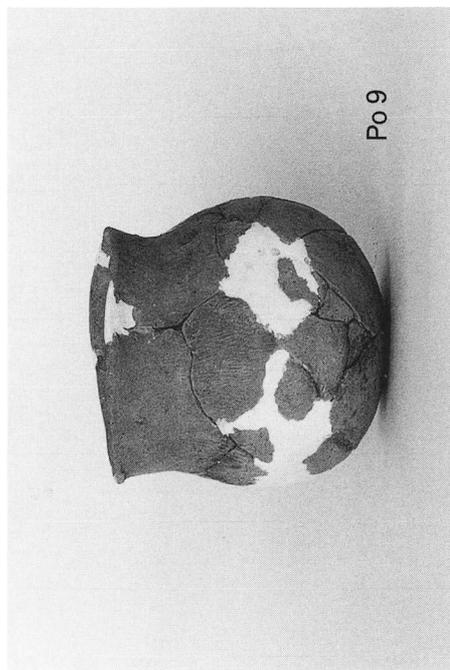
31号墳出土遺物図・1



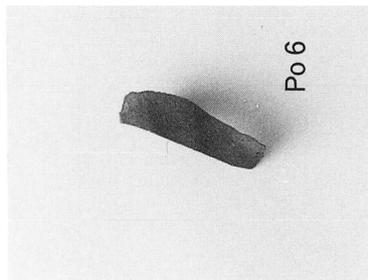
Po 7



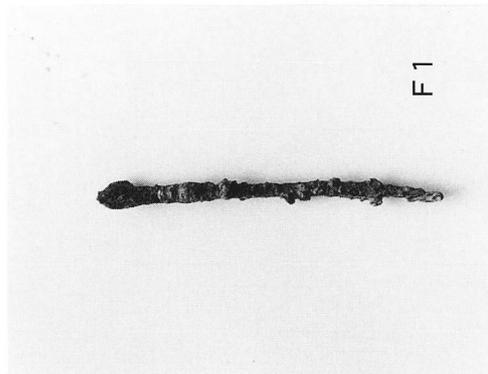
Po 8



Po 9



Po 6



F 1

岩美町文化財調査報告書第20集

高野坂31号墳

発 行 2001. 2

発行者 岩美町教育委員会

〒681-0003

鳥取県岩美郡岩美町浦富675番地1

TEL (0857) 73-1302

印 刷 中央印刷株式会社

〒689-1121

鳥取県鳥取市南栄町34番地

TEL (0857) 53-2221